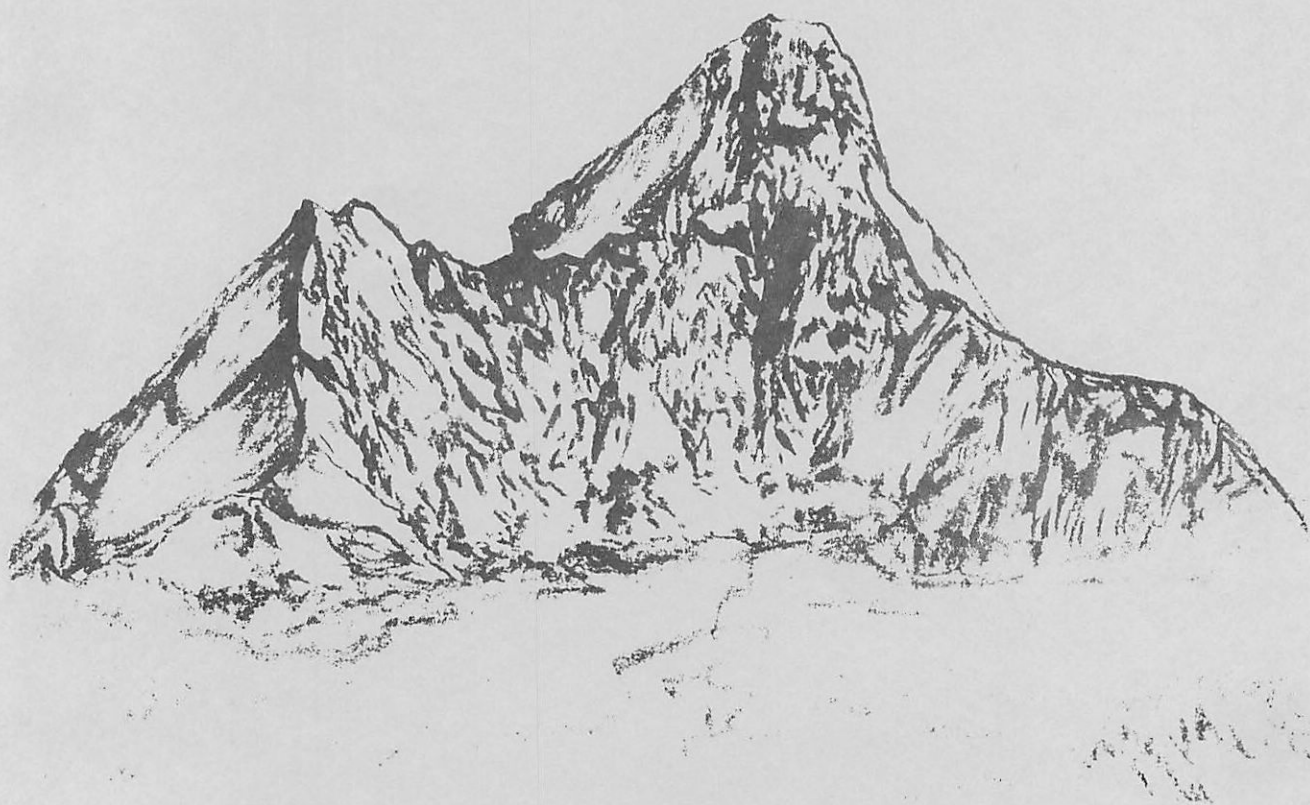


R&V

20号

1996年

冬号 1月～3月



R&V

20号



上高地の風景

《photo by H. Nayuki》

'96 冬

ACC-J 茨城

R&Vを支えてくれた仲間達

山岳会に入って良かったと思う一番の理由は多くの仲間ができたことである。今号で20号ということは会報を発行し始めてからまる5年になるわけである。しかし残念ながらこの5年の内に種々なる都合で何人かの仲間が去っていった。その仲間達は皆当会の一時代を支えてくれた人達である。OBとして残っている者もいれば、転勤で遠くに行ってしまった者もいる。バックナンバーをひもといて、R&Vの1ページを飾ってくれた仲間を思い出してみよう。

栗原孝君。創刊号を編集してくれた現在OB。ACCJ東京から茨城に移籍してきた人物である。漢方薬研究という職業がら、薬草山菜きのこ等に詳しい。人間が真面目。山でも真面目。考えも真面目。右も左も分からない時、仕事で忙しい中、編集を担当してくれた。20号を数えることができたのも彼のおかげである。最近忙しくて集会に出てこないが、たまには顔を見せてもらいたい。

高木均君。博士（学者）で物静か。岩を登るときフラットソールは使わず登山靴。しかし岩登りには安定した上手さがあった。2号から10号までワープロで編集部の一員として頑張ってもらった。当会に入った第一の理由はハンググライダーがやりたかったからとか。それを聞いてから責任を感じ、当会の入会案内書にはハングの文字は消えた。その後パラグライダーを始めたが、現在もやっているかどうかは不明。

川上浩史君。シトロエンのポロ車で集会に来て「本図さん僕はですねー、実はですねー、そーなんですよー、どーしても登ってみたいんですよー」と独特の口調で話す。白馬岳主稜の時は缶ビールを20本も背負ってくれた。行動食はもっぱらソーセージをかじり、馬力があるのかと思うとシャリバテの激しい奴だった。立教大学の学生だったが、今は群馬に就職し沼田山岳会で頑張っている。

庄司真陸君。片道2時間をかけて神栖町から土浦の集会に通った努力家。馬力は相当なものでシェルパのニックネームを持っていた。気は優しく力持ちとはこいつのことだ。彼の疲れた顔をみたことは一度もなかった。登山より自転車の方が好きで、山で海外に行くことはなかったが、自転車ではツールドフランスを見に出かけて行ったことがある。自転車のことになると一所懸命話してくれたが、私にはチンプンカンプンでつまらなかった。転勤で千葉に行ってしまったが最近の連絡では山には全然行っていないそうである。

長久保加寿子さん。龍ヶ崎の彼女とは4回の山行しか思い出せない。新人歓迎山行、救助訓練、白山、角落山だがやはり白山での思い出が多い。彼女が名（迷）ナビゲーターだったこと。露の臺と土筆のテンプラがおいしいといって目を輝かせたこと。けっこう長い登りでつらかったと思うが頑張り屋だったこと。帰りに寄った永平寺で意気投合し、今度2泊位で永平寺に精神鍛練にこようなどと話が決まったこと（話の上だけで実行はしていない）。今は家庭の事情で山には行けないそうだが持ち前の頑張精神で楽しくやっていると思う。

馬淵勝則君。彼との山行で特に強く残るものはない。あまり自分の考えを表に出す人間ではな

かったので目立たない存在であった。でも一つだけ覚えているのが正月合宿の帰り、左右の靴を履き間違えて歩いていたことだ。会員に指摘されるまで気づかず皆に大笑いされると、なぜそんなにおかしいのと平然としていた。山を続けていれば大物になったかも知れない。茨城大学を卒業し、社会人になったと思うが今はどうしているかはわからない。

高田暢年君。言わずと知れた前チーフリーダー、現在OB。家庭の事情で急遽山口に帰ってしまった。彼はチーフリーダーとして適任の人物であった。クラブの一時期は彼によって支えられてきたと言っても過言ではない。皆に好かれ新人の面倒を良くみてくれた。惜しむらくはあと3年茨城にいられたならば、もっともっと良い所を登れたろうにと思えることだ。彼に育ててもらった連中の登りざまを見てもらいたいものである。山口で山岳会に入ったという話はまだ聞いていない。遠くの山シリーズ第2段は屋久島の予定だ。お誘いするつもりなので都合をつけてもらいたいものである。棚からボタモチとは彼のためにあるような諺、当会に入って最良の奥さんを射止めた徳人でもある。当クラブに足を向けては寝られないだろう。

原田眞由美さん。前出の高田が徳人であれば、当会に入っただけに犠牲になってしまったのは彼女である。おかげで山口の方まで連れて行かれてしまった。彼女との山行思い出は数限りない。恐らく旦那とより私との山行回数のほうが多かったと思う。一時期の彼女は本当に山に燃えていた。休暇はすべて山に使った。技術より気力で登っていた。だから登らせてやりたかった。事実衝立コップ明星南壁と随分登った。そして退職してヨーロッパアルプスまで行った。送別会の時、青春をすべて山にかけてきたが良かったと思っている。後悔はしていない。と言われたが、あの言葉は私にも非常に嬉しかった。今は子育てに忙しいことだろう。

高須章君。在籍期間は短かったが山にかける情熱は相当なもの。当人はフリークライミングに傾倒していたが、当会にてアルパインとはどういうものかわかってくれたと思う。彼といえ、まず頭に浮かぶのが北岳合宿キジ騒動である。後2年在籍すればアルパインでも頭角を出せたかも知れない。残念ながら仕事の関係で大阪に帰ってしまった。

佐藤文則君。山行で彼にすっぱかされたことは2度。すっぱかしまではいかないけど直前に断られたことは何回もある。頭にきて奴とはもう山には行かないと怒ったこともあるが、憎めなくてかわいいところがあった。その後何回も行っただけがそれを証明している。山に関しては勉強家であったが、実践を共わない山に対する間違った知識をかなり持っており、とんでもないことを言い出すこともあった。精神的に強くなれば相当登れる奴だ。今は宇都宮のグループ・ド・三十路というクラブでクライミングに励んでると思う。

村上晴美さん。現在休会中、ケニア・ムランガ在住。突然アフリカに行くと言い出し2年間青年海外協力隊として行ってしまった。なんで急にと思ったが、最近になって彼女はキャリアウーマンの典型だということがわかってきた。最新情報ではケニア山に登ったとのこと。当会のヒマラヤ遠征には絶対参加するそうである。今年12月には帰国の予定。今後の活躍が楽しみである。

ACCJ茨城を支えてきた仲間はまだまだたくさんいる。ここでは会報を出し始めてからの5年間のみ思い出してみた。山から遠ざかっている者、他の会で頑張っている者、いろいろだが又

一緒に登る機会でもあれば最高である。

無事20号を迎えられたのは君達のおかげである。ここに感謝の気持ちを申し上げると共に、皆様のますますのご発展とご健勝をお祈り致す次第である。

(本図一統)



《目次》

1996年 冬号1月～3月 ACC-J茨城

巻頭文《R&Vを支えてくれた仲間達》	...	1
集会報告	...	3
山行報告	...	4
赤道直下のホワイトクリスマスをケニヤ山で!	...	7
年末・正月合宿―遙かなる剣―	...	17
1996' 焼岳・冬合宿“白昼夢・カイルスの幻”	...	21
月例山行復活か?	...	26
金峰山	...	28
ウメコバ沢アイスクライミング	...	29
谷川岳・一の倉沢・一の沢左稜	...	30
松木沢・黒沢&無名沢 (アイスクライミング訓練)	...	31
袋田の滝 (四度の滝) アイスクライミング	...	32
焼岳山行	...	33
八ヶ岳・中山尾根	...	35
谷川岳天神尾根	...	36
吾妻連峰縦走	...	38
八ヶ岳横岳大同心南稜	...	40
谷川岳幽ノ沢ノコ沢大氷柱	...	42
乗鞍・山スキー	...	44
〇〇氏の山談義	...	46
友好団体の月報・会報・その他紹介	...	49
編集後記	...	51

表紙絵… pangbocke (パンボッケ) へ向かう道から見えるアマダムラム by … J. Nmai

集会報告

(於、スカイラークガーデン)

【 1月】

1月10日

出席者 本図、木村、菊池、鯉河、古山、告、大崎、笹平、今井

1月24日

出席者 本図、古山、鈴木、菊池、笹平、告、広瀬

【 2月】

2月 7日

出席者 本図、菊池、生井、古山、告、笹平、坂本

2月21日

出席者 本図、古山、菊池、今井、高木、紺野

【 3月】

3月 6日

出席者 本図、大崎、笹平、告、生井、菊池、新美、紺野

3月27日

出席者 本図、古山、鯉河、菊池、今井、大崎、笹平、高木、新美、生井

山行報告

1996年 1月～3月

1995年

12月23～26日 ケニヤ山 村上、他13名

【1月】

12月28日～1月1日 剣岳・早月尾根(中退) L古山、坂本、告、笹平

12月31日～1月3日 北ア・焼岳(中退) L本図、生井、大崎

1月3～4日 金峰山 今井、他3名

1月7日 松木沢アイスクライミング(ウメコバ沢) L古山、告

1月14日 谷川岳・一ノ倉沢・一の沢左稜 L本図、告

1月28日 松木沢アイスクライミング(黒沢、無名沢) L古山、笹平

【2月】

2月4日 袋田ノ滝アイスクライミング L古山、本図

2月11～12日 谷川岳・石楠花尾根(中退) L古山、告

2月11～12日 北ア・焼岳 L本図、生井、松原、名雪

2月17～18日 八ヶ岳・中山尾根&阿弥陀北西稜 L古山、笹平

2月18日 谷川岳・天神尾根 L本図、生井、大崎

【3月】

3月6～7日 吾妻連峰山スキー L古山、今井

3月10日 八ヶ岳・大同心南稜 L古山、本図

3月20日 岩トレ・御岩山 L本図、古山、告、笹平、大崎、新美、紺野

3月24日 谷川岳・ノコ沢大氷柱 L古山、本図

3月31日 乗鞍・山スキー L古山、本図、今井

赤道直下のホワイトクリスマスをケニア山で！

1995. 12. 23~26.

パーティ 村上晴美、他13名

ここ遠くケニアまでは原稿の催促が及ばなかったので、のぼしのぼしにしているうちに遅くなってしまいました。とても時期はずれになってしまいましたが、折角ですのでケニア山への山行報告をさせて戴きます。

皆様お元気でいらっしゃいますか。私は、一年中半袖で過ごせるという気候に身も心もすっかり順応して、今回の山行などは体中が凍傷になるんじゃないかと心配いたしましたが、とりあえず無事登頂してまいりました。では、報告をはじめましょう。

第1日目（12月23日）

ケニアの首都ナイロビを車で出発した13名に、途中ケニア山の麓のナニユキという町から1名そしてポーターとガイドが加わって、一気に大名山行の雰囲気漂わせつつケニア山国立公園入口へと向かう。ここで既に標高2440m。怠惰な生活に慣れた体に風がとても冷たい。昼食をとったあと、ここから登山開始である。車も通った跡がある樹林帯の山道を、体慣らしということでだらだら歩く。なんたって村上が先頭切って歩いているのだから、そのだらだらぶりもなかなかすごいのである。ちなみに我々のザック一人に一人ついてるポーターさんが運んでくれるので、自分ではとりあえず必要なちょっとしたものだけ背負っているわけで、なんともはやA



神々の座は遙か遠く



不思議な植物ロベリヤと記念写真

CCJの皆様には顔向け出来ない位、お気楽山行なのである。3時間程花の写真など撮りつつ歩いていると小屋に着いた。ガイドが『テントはどこにある?』と尋ねる。『テントー?』なんて持ってきていないのだ。どうやら、ツアー会社間で連絡のいき違いがあったらしい。とりあえず小屋は空いていたのでベッドを各々確保し、ガイドは宿泊許可証のようなものをとりに街に下りていった。我々はこの小さな事件がこれから先にどのように発展していくのかということには全く思いを馳せず、遠くに見えるケニア山山頂やら、夕焼けやら、降るような星空やらに感動しつつ眠りについたのであった。

第2日目(12月24日)

朝食後、小屋を出発する。今日も天気が良い。パイナップルのお化けみたいな植物(ロベリア)と記念撮影などしつつ、本日ものんびり歩いている。途中かなりの湿地帯になっており、長靴を持ってきた人達はどんどん歩いていく。トレッキングシューズの私は靴下までびしょりになってしまう。ところがポーターは普通の運動靴だったりするのに平気なのだ。やはり彼らはすごいなあ。植生も風景もどんどんかわっていく。西部劇の背景のようだったり、足尾の風景に似ていたり、三ツ峠の岩場の下を歩いているようだったり、屏風岩にそっくりな(ような気がした)岩があらわれたり、いろいろ想像できておもしろい。動物にもお目にかかる。この日は、生物学的に象に一番近い種だというハイラックスがたくさんいた(でも、全然象には似ていません)。昼前から急に雲行きが怪しくなる。遅れた人を待ちつつ簡単な昼食をとる。が、待てども待てども来ない。待つこと1時間半。やっとたどりついた内の1名はかなりしんどいらしく、ここから下山することになる。お別れもそこそこに、体の冷えきっていた我々は天気の悪化しないうちに

と先を急ぐ。小屋に着く直前にあられが降ってきて、『まずいなー』と思ったが、それもすぐに止み、4050mの本日の宿泊地に3時過ぎに到着。とにかく寒い。完全装備一步手前になる。翌朝の朝は早いためにはなるべく早く休もうと思って『お茶はまだか』『飯はまだか』などと言っていたのだが、そのうち一人のザックがないということがわかり大騒ぎになる。ポーターは全員いる。ということは、昨夜泊まった小屋に置き去りにされたらしい。お気楽大名山行のつらいところで、こうなるとシュラフもなければ防寒具もなんにもないということになってしまった。話し合の末、ポーターが下に下りて取って来ると云う事になる。夕方5時にポーター4名が出発。登りで我々が実質6時間程かかった道程を、暗闇の中で彼らは果して無事に帰って来られるのだろうか。残った我々は特に何もすることがない。本日の行程でよほど疲れたのか、一人また一人と寝てしまい、夕焼けウォッチングをしたのは4名だけだった。予定より遅くなった夕食をとり、明日のためにとさっさと寝る。あまりの寒さに、私はホッカイロを使用。眠ったと思ったら起こされた。夜中の1時に、ザックを取りに行ったポーター達が帰ってきて入口で騒いでいたのだ。往復8時間。すごい！すごいんだけど皆を起こさないでくれー！

第3日（12月25日）

夜中の1時に起こされて、また眠りについた我々は2時半に再度起こされた。御来光（とケニアでもいうのかどうか知らないけれど）を頂上で拝むためである。軽い朝食をとり3：25に出発！なのだが、ここで高山病がひどくなった2名がリタイア。小屋で休んで様子を見ながら後で合流することにして、11名は未明の暗闇の中ヘッドライトやら懐中電灯やらで各々の足元を照らしつつ進んで行く。天気は非常に良い。満点の星が降るようである。北斗七星から南十字星までよく見える。急登である。ところどころ凍っていたり、ガレ場だったりするところを、一歩一歩登っていく。振り返るたびに、小屋の明りがどんどん下方に遠ざかっていく。天空の星々に向かって歩んでいるような気がする。何度か小休止をとるが、立ち止まると非常に寒い。気温計を見ると-5℃だ。私は雪だるまのように着ぶくれ、手袋の中には小さなホッカイロまでいれているのだが、休んでいるのが苦痛に感じる。途中から氷河があらわれ、かなり上まで登ってきた事を実感する。頂上は風が強いので頂上への最後の登り一步手前で時間調整のため休憩する。その場所でもかなり風が吹いており、夜明け直前でもあったので、体が凍傷になるんじゃないかと本気で思った。なんと私の体は軟弱になったことだろう（もともとという声が聞こえるようだ）最後の登りは軽い岩登りのようなことをして、6：16にレナナ峰登頂。黎明の中、無事の登頂を握手にて祝った後に撮影大会である。モルゲンロートに染まったネリオン峰（5188m）をバックに、はたまたパウロ何世かが建てたという十字架をバックに、もしくは遥か遠くまでまるで槍が岳から富士山を望むような感じに小さく見えているキリマンジャロ山をバックに写真を撮る。そして赤道直下の氷河を見下ろして、ここでスキーをしたら気持ち良いだろうと思ったり（実際にできます）、とその間にもネリオン峰の色は刻々と変化して行く。というわけで、寒いのも忘れて狭い頂をカメラを持ってうろうろするのである。30分程山頂で過ごした後に、さあ下山である。ここから朝食を食べる予定の小屋まではかなり距離がある。雪の部分は滑り下り、



モルゲンロートに染まるネリオン峰の前で



レナナ峰頂上にて



レナナ峰頂上にて

ガレ場の部分は滑りたくないのだが滑ってしまい転んで一回転するやつまでいるし、たいへんなのである。だんだん寝不足とお腹がすいたのとでペースが落ち、ようやく小屋にたどり着く。ここで、前日泊まった小屋から直接荷物を運んできたポーター達に高山病の二人の様子を聞いた。一人は大丈夫らしいのだが、なんともう一人は自分で歩くことすら出来なくなっているらしいとの事（「らしい」としかこの時点ではわからないのである。無線必携を痛感！）、ヘリコプターを呼ぶとか、ポーターに背負ってもらって下におろそうとか、いろいろ話し合ったのだが、彼らのいる小屋に連絡する術は歩いて戻るしかない。下界に連絡する術も今いる所では全くない。ということでポーターに「最悪の場合は背負って下ろして欲しい」とたのみ、彼らのいる小屋に戻ってもらう。後は彼に任せて折るのみである。

さて、ケニア山山麓にはたくさんの美しい湖があるのだが、この小屋の裏にもその一つがある。対岸には不思議な植物が生えており、彼方に朝方自分達が立っていた白き峰峰が湧いてきた雲の間に見え隠れしている。これで寒くさえなければここに住むのは良いなあと思うような景色である。朝食後（といっても既に10:50）出発。本日の宿泊予定場所は遠いので、とにかく歩かなくてはならない。しかし、このルートは振り返れば雪におおわれた峰峰が見え、道の両脇には様々な植物が花を咲かせており、また景色がどんどん移り変わって写真を撮るのには非常におもしろい。ので、後れがちになる。と、そのうち足の先が痛くなってくる。ので、ますます後れてしまう。とどめは私の苦手な渡渉が、昼食を食べる場所のすぐ手前にあって、見事に川に落ちてしまう。誰もカメラを構えてなくて良かった良かった。昼食後、ここからは車も通れる広い道をてくてく歩く。そうそう、高山病だった二人はなんと劇的に復活して無事私たちと合流したのであった。（低いところへ下りれば本当に元気になるんだなあ。足が痛くてたらたら歩いている私

などは抜かされてしまった位だ。でも、よかった、よかった。) 道にはたくさんの動物のふんが落ちていて。一回の排せつ量が洗面器一杯分位のものである。象だ! 目の良いケニア人ポーターが遠くの方を指さして「あそこにバファローがいる」とか教えてくれる。彼らの視力はマジで4.0位あるかもしれない。ようやく本日宿泊予定のロッジに夕方着く。でも、部屋がない! えー!? 疲れているのと、あまりにアクシデントが続くのとで皆切れそうになる。話し合いの結果、物置小屋のような所を借りて、板の間にごろ寝ということになる。まあ、屋根と壁があるところに寝られるんだからいっかー、と思ったが、実はポーター達の泊まった小屋の方がずーと良かったりするのだからおもしろいなあ、ケニアって。夕食の後、登頂祝いとクリスマスのためにここまで運んだケーキとワインでパーティをした後、眠りにつく。長い一日だった。...

第4日目(12月26日)

日の出とともに起きる。朝食後、出発。車が通れる道なのだが、(ロッジに泊まっていた人々はもちろん車で来ていた)、途中道が悪いところがあると言うことで私達を迎えてくれる車は途中で待っているという。それを信じて我々はのんびり下っていく。ここはもうすっかり樹林帯である。本日は、糞だけではなく実物の象にもあってしまう。サファリも同時に楽しめてしまうのだ。しかし、歩けど歩けど我々を待つ車はいない。4時間以上歩いて、ある村にたどり着き『これはだまされたなあ』と悟ったので、その村で車をチャーターして遅れている人々を拾いにいってもらい、それに乗ってチョゴリアという町まで行った。ここで、のほほんと待っていたガイドに出会う。一応彼には言いたいことは言ったがここはケニアなのでいくら何を言っても言い訳しか返ってこない。怒る方が馬鹿をみる。さて、あとはナイロビに帰るだけである。すんなり帰れたのならここは「そして我々は、あまりにも美しかった神神の座に触れることのできたという思いを各々の心の内で反芻しつつ、一路ナイロビに向かったのだった。」なんて書いて終わりなのだが、今回の山行は最後まで気を抜けなかった。まず用意されていたナイロビまでの車はなんと!、なんて説明すればよいのか、軽トラックの荷台部分に屋根が付いていてそこに木の椅子がコの字形に設置されているようなものである。ケニアではよく使用されている一般大衆用交通機関である。ここに我々13名+ガイドがぎゅうぎゅうに乗る。ほとんど人間オイルサーディンである。スピードは出ない。「まあ、動くからいいかあ」とケニア化した我々は思ってしまう。甘かった。もうすぐナイロビという頃夕暮れになり、だましだまし走ってきた車がとある坂道でとうとう動かなくなる。皆で車を押して坂の上のガソリンスタンドへ運ぶ。車は直りそうにない。旅行会社に連絡し、他の車をすぐに回してもらうようにする。1時間経つ。すっかり夜だ。まだ車は来ない。昼飯も食べていないのでお腹はとても空いている。緑石に並んで腰かけてぼんやり星を眺めながら「いったい私はこんなところで何をしてるのかなあ」などと思っている。更に30分、やっと車がきた。これはピカピカのワゴンである。あるんだったら、初めからこれを使えよなー!。とりあえずこれで全員無事にナイロビに帰ってこれたので良かったことにしましょう。この後我々は旅行会社に対して何枚ものレポートを書き、ツアー費の部分的返還を求めたのだが、やはりここはケニアだった!!

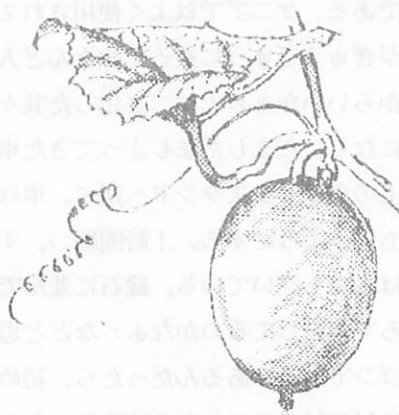
コースタイム

- 12/23 ナイロビーケニア山国立公園入口(車にて移動)
国立公園入口(2440m) (14:00) - オールドモーゼスキャンプ(3150m) (17:10)
- 12/24 オールドモーゼスキャンプ(7:20) - シンプトンキャンプ(4050m) (15:10)
- 12/25 シンプトンキャンプ(3:25) - レナナ峰(4985m) (6:15~6:45) - ミントスハット(4190m)
(9:20~10:50) - メルーマウントケニアロッジ(2950m) (17:20)
- 12/26 メルーマウントケニアロッジ(7:50) - ゲディサニ村(12:20) - ゲディサニ〜チョゴ
リア〜ナイロビ(車にて移動)

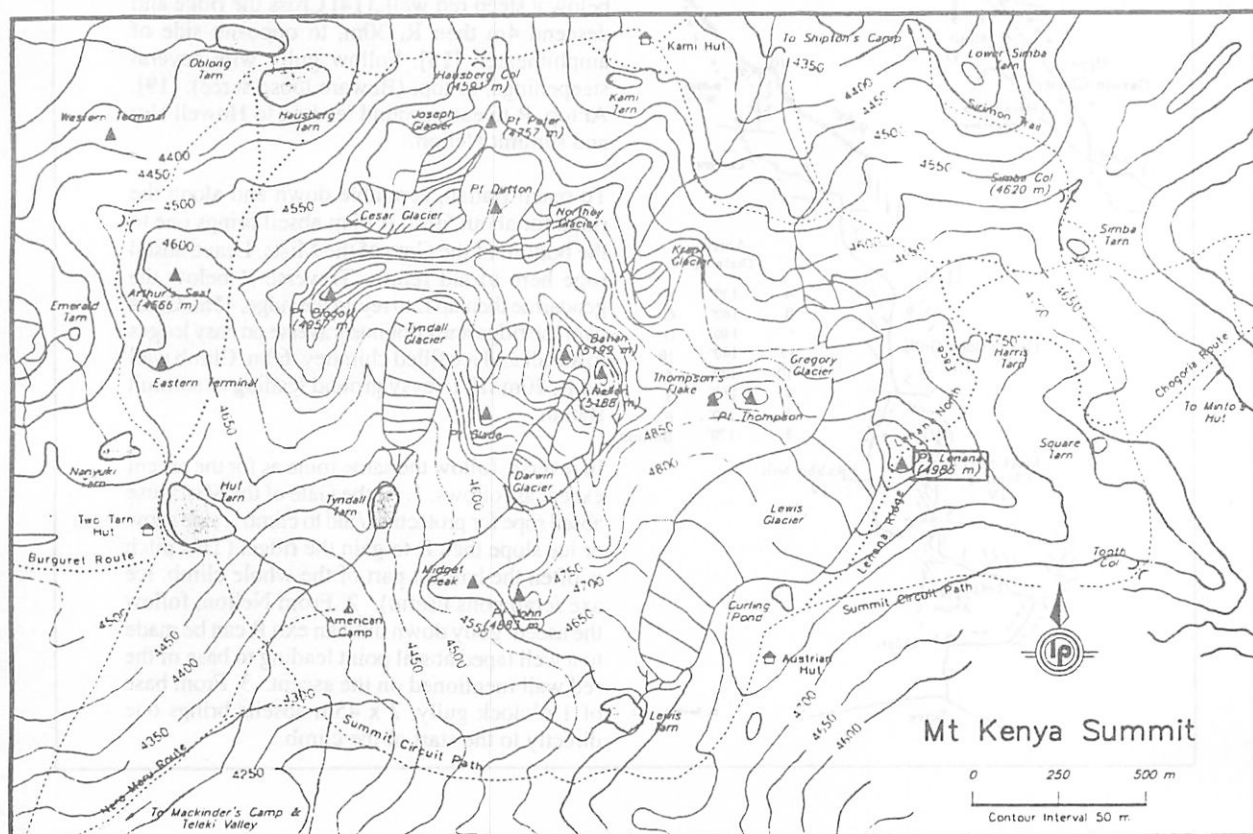
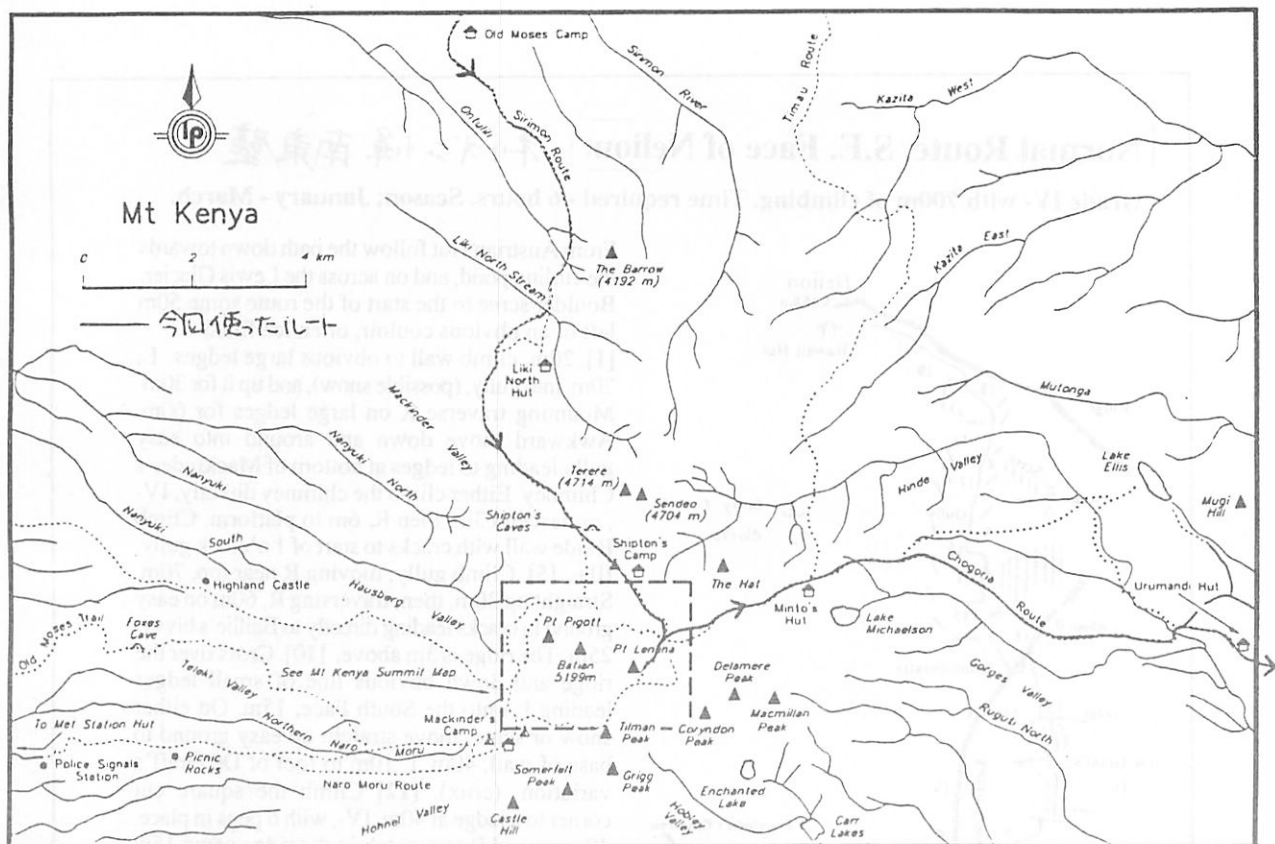
追伸

パチアン峰北壁とネリオン峰南東壁のルート図を入手しましたので、御参考にして下さい。ケニア山は日本の剣岳のスケールが大きい山と思って下さればだいたい想像できるかと思います。(険しさと堂々とした山容においては、アフリカ第一の山だということです) ものすごく「カッコいい!!」山です。是非一度、いらしゃって下さい。

(村上 記)



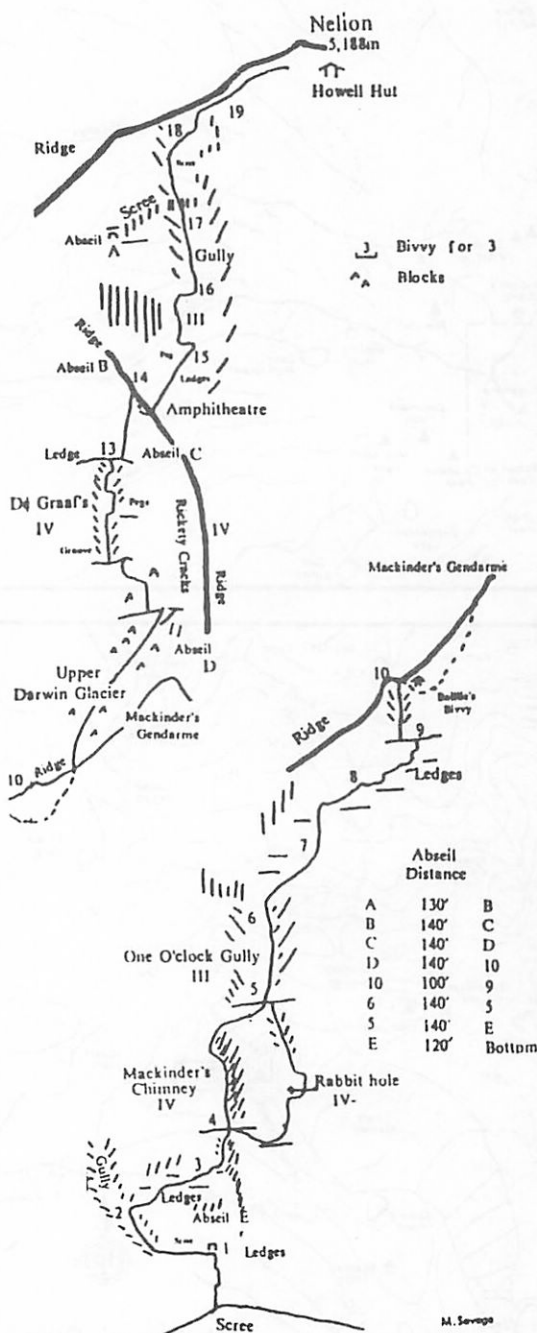
カラスクリ



[Normal Route. S.E. Face of Nelion.]

ネリオン山南東壁

Grade IV- with 700m of climbing. Time required - 6 hours. Season; January - March.



From Austrian Hut follow the path down towards the curling pond, and on across the Lewis Glacier. Boulder scree to the start of the route some 50m left of an obvious couloir, often ice filled.

[1]. 20m, climb wall to obvious large ledges. L, 20m, into gully, (possible snow), and up it for 30m. Mounting traverse R on large ledges for 60m. Awkward move down and around into easy gully leading to ledges at bottom of Mackinder's Chimney. Either climb the chimney directly, IV-, or descend 3m, then R, 6m to platform. Climb R side wall with cracks to start of 1 o'clock gully, III+. [5]. Climb gully, moving R near top, 70m. Straight up 30m, then, traversing R, 60m on easy ground to cracks leading directly to Baillie's bivvy, 25m. The ridge is 3m above. [10]. Cross over the ridge and down obvious line of small ledges leading L onto the South Face, 15m. On either snow or scree, move straight up easy ground to base of wall, 40m. L 10m to foot of De Graaf's variation. (crux). [12] Climb the square cut corner to a ledge at 40m, IV-, with 6 pegs in place. 40m up and R to a notch in the ridge some 15m below a steep red wall. [14] Cross the ridge and descend 4m then R, 30m, to opposite side of amphitheater. [15]. Follow gully with several steepenings, to top. (Beware loose scree). [19]. At top, R to easy ground leading to Howell Hut and summit Nelion.

To reach Batian, scramble down and along the ridge for about 50m. A 40m abseil brings one to the bottom of the Gate of the Mists. Leave abseil rope here to aid return. Traverse R below the gendarme then up L to rejoin the ridge, 45m. Cross over the ridge and continue traverse on easy ledges to a wall and ice filled chimney, 60m. Climb wall on R, 20m III, to easy ground leading to summit Batian.

In reverse, follow the same route as for the ascent except as follows. 1. At the Gate of the Mists, use abseil rope for protection / aid to climb L side snow or ice slope then R to gain the ridge. (This pitch is often the hardest part of the whole climb. Ice axe / crampons useful). 2. From Nelion, follow the ascent gully down until an exit R can be made to a well taped abseil point leading to base of the red wall mentioned on the ascent. 3. From base of 1 o'clock gully, 2 x 45m abseils brings one directly to the start of the climb.

North Face Standard Route on Batian

バチアン峰北壁

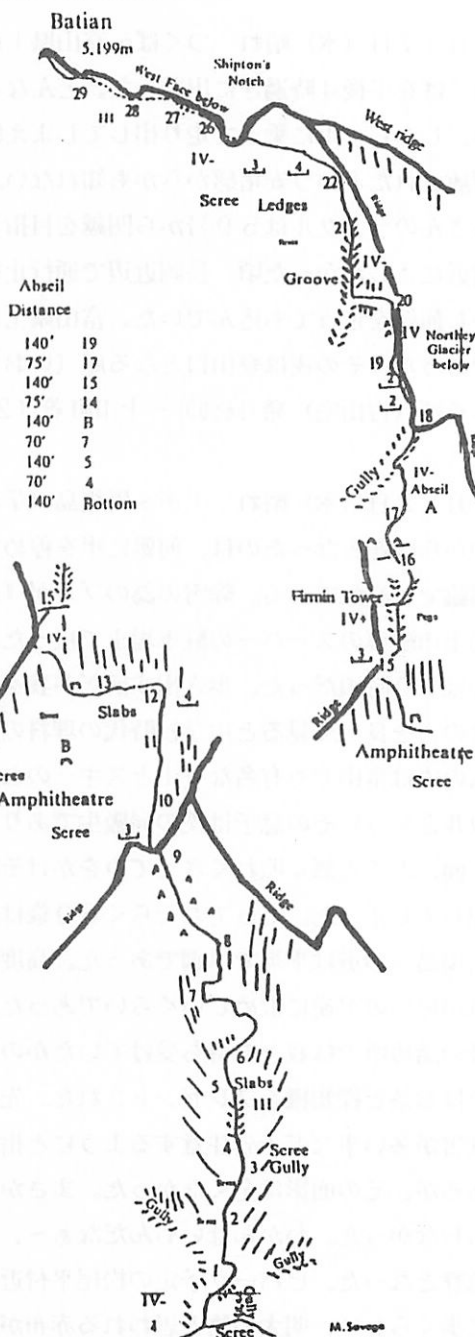
Grade IV+ with 1,100m. of climbing. Time required - 10 hours

Season: July - September

From Kami Hut, take the path towards Pt. Lenana. On passing the base of the North Ridge, 1/2km. ascend steep scree to a point almost level with the snout of the Krapf Gl. A "cross-on-circle," and a memorial plaque marks the start of the route 15m left of a wet overhanging chimney.

[1]. Up 10m, IV-, then R, 10m into the gully. Up 25m to belay on L. Ignoring the gully on L. scramble straight up to narrows at 90m. (Climb this mainly on the R). Up R facing corner, 25m III+. [5]. Up broad slab on L, to a wall, 40m, then R along base of it for 3m, up 5m to large ledges. Move L, 30m, into gully. [7]. Up gully for 5m, then R, 8m, across wall before climbing through slight overhang with peg in place, 15m, to obvious belay. The gully continues easily for 40m, joining the amphitheater at about 1/3 height. Move up R side of the amphitheater, 150m, to where a high traverse L across scree and then slabs, brings one onto the ridge 20m below the foot of the Firmin Tower. (many good bivvys in the amphitheater and one for 4 persons at base of F.T.) [15]. Climb obvious crack in tower till a move L onto wall can be made, at 20m, (possible belay), move into R crack, at top step back L to rejoin original crack, continue to the top, 45m IV+. Easy rocks for 20m, then 40m, IV, to top of tower. Descend to col then along ridge 60m, to a steep wall. Bivvys on ridge. [19]. Step R, 3m, then climb wall direct, (probable ice filled cracks), 30m, IV-. Move L, across ridge line, then up and across easy slab into a wide grove, 25m. Climb grove to top, 30m IV-. Continue easily up L side of ridge until reaching several good bivvy sites. Traverse L, 150m, on easy ground to a point level with the base of Shiptons Notch. [25]. Cross into the notch IV and cross on the west side (poor rock), then up 10m, III+. Follow ridge, mainly on the R, (very exposed as the West Face is below), for 4 pitches to the summit, IV- (in places).

Descent is by the same route as that for the ascent: exception is; 3 x 40m abseils from the top of the F.T. into amphitheater where easy traverse rejoins with the route up. Take care exiting the amphitheater in the correct place. Most sections above the F.T. are best down climbed. Below the amphitheater - abseiled.



年末・正月合宿一遙かなる剣一

1995. 12. 27~1996. 1. 1

パーティ し古山正文、告広道、笹平孝、坂本昭宏

12月27日(水) 晴れ つくば~富山県上市町

つくばを午後4時過ぎに出発した。どんなときでも出発前というのはあわただしく、落ちつかない。しかし、車に乗って走り出してしまえば何処と無く『ほっ』とする。日常のあらゆる事から解放されたという安堵感からかも知れない。開き直りとも言うかも知れない。

告さんのランクルは50号から関越を目指した。日本海側は冬型の気圧配置で大雪らしい。前橋付近にさしかかった頃、長岡近辺で通行止めと言うことなので、長野回りで行く事となった。しかし何処を走っても込んでいた。富山県上市町に着いたのは、28日の深夜2時を過ぎたあたりであった。その夜は登山口となる庵(いおり)の路上にテント泊となった。

つくば(古山宅)発(16:00)ー上市町着(28日)(2:00)

12月28日(木) 晴れ 上市~馬場島(700m)~松尾平(1047m)

朝から問題となったのは、何処に車を停めておくかである。何せ長い山行となるやもしれず、道路脇では心配である。除雪の為のブルが『がが』と雪と一緒に排除することもある。結局上市駅裏のスーパーの駐車場まで戻った。駅からは、タクシーを利用した。庵から歩き出したのは10時頃だった。歩き出す前だが我々同様馬場島に向かう若くは見えない夫婦にであった。女性の方を良く見ると中学校時代の理科の先生であった。何とこんなところで会うなんて、ご主人の方は富山でも有名な登山とスキーのお店のオーナーである。(佐伯さんと言います。店はチロルという)その息子は僕の同級生であり、息子が庵まで送ってきたらしかった。懐かしと思う反面、どこと無く照れくさくて声をかけそびれてしまった。自分のことは忘れて、少し二人を心配してしまった。だっておそらく60歳は過ぎているはずだからだ。

馬場島への道は平坦で単調であった。高度が上がるわけでもなく、とてもつまらなく感じた。天気がいいのが逆に恨めしいくらいであった。馬場島まで3時間ちよいかかったろうか?、富山県警の詰め所では我々を待ち受けていたかのごとく、窓から顔を出して呼び止めてくれた。詰め所ではお茶と探知機をプレゼントされた。先行パーティとして明治大学が入っていることや、今年は雪が多い事など十分注意するようにと指導を受けた。馬場島は、高校時代にキャンプの経験があるが、その面影は全くなかった。まさか冬の剣を登るために、ここに来るなんてぜんぜん想像もしなかった。わかんないもんだなあ、人生なんて。馬場島から早月尾根に取り付き、すぐに急登となった。ビパーク予定の松尾平付近まで1時間くらい歩いた。冬道は夏道よりは稜線よりに歩くらしい、明大の物と思われる赤布が付いていた。古山さん以外の3人(僕を含めて)の疲れが激しく手前でビパークとなった。夜は少し風があるものの星も見えていた。

上市発(9:00)－庵(10:00)－馬場島(14:00)－松尾平(15:10)

12月29日(金)雪 松尾平～早月小屋(2224m)

昨日の晴天とは打って変わって雪となった。ここから早月小屋まで、一気に登ることになる。トレースはなくラッセルとなった。膝下程度のラッセルではあるが、急登が続くため、早め早めに先頭を交替して進んだ。(そうだ!ここからは雰囲気を出す為にみんなのことを隊員と呼ぼう)もちろん隊員達は、カンジキを使用した。いつだったか山野井氏の手記を読んだ。彼はカンジキを履かないそうだ。何やら四つん這いになって歩くと書いてあったが、ぴんとこなかった。着けなくても沈まず機動的に歩けるらしい。これはおそらく急な登りだけに言える事だと思うんだけどな～。一流クライマーを目指す皆さん、試してがってん。

確実に高度を稼いでいるとは思いますが、視界も悪く現在地が分からない状態が続いた。12時過ぎに明大のベースキャンプ(1600m付近と思う)に到着した。剣を狙うにあたってこの辺りにベースを作っていることから、おそらく早月小屋辺りにもキャンプがあるのだろう。極地法の練習かも知れない。やはり彼らはヒマラヤ等の大きな山を意識しているのだろうか。昔風のダブルヤッケを着て、キスリングを背負っている彼らにたくましさを感じた。

明大ベースキャップを後にして先を急いだ。降りしきる雪の中、我々は少しずつ、疲労していた。今日中に早月小屋に到着しなければならないのに、先が読めない苛立たしさもあった。古山隊長もどこと無く激しい表情を見せていた。まず、告隊員のベースが落ちてきた。坂本隊員と古山隊長のラッセルの時にベースを乱されるらしい、確かに坂本隊員の足の長さは、会の中でも長いほうである。(正確に解説すると足はさほど長くはないが、ストライドが長いのである)古山隊長はそうでもないが、体力のお化けである。こと寒さに対する体力はシベリア犬並みである。しかしシベリア犬と足長おじさんにベースを乱された告隊員はこの辺りから愛好している煙草に別れを告げる決意をしたらしい。(その後実行したかは定かではないが……………)一方、若手新人隊員である笹平隊員は、生まれつきのニコニコ顔のせいか、つらいのか平気なのか今一つ判断が付きにくい。人にはいろいろな癖があります。彼の癖は時折『あっ』と奇声を発して我々を驚かせることである。『何だろう』と耳を傾けるとその内容のつまらなさに損をする事がしばしばであった。相変わらず雪は降っていた。体力もそろそろ限界近くにあった。『いったい早月小屋はどこにあるのだろうか』やり場のない疑念や不満が出始める。4時を目前にした頃であった。白一色の中に一本の煙突が見える。おおっ早月小屋だ。何とかたどり着いたという感じであった。この先を目指すにはいささか情けない感じであった。息付く暇もなく設営である。動きの悪い3人に対して隊長の罵声が飛ぶ。『なにやってんだ!、馬鹿野郎。もたもたすんじゃねえぞ、コラッ』というのは嘘で。しかしながら到着したことに対する精神的な緩みを持たせない様にと、隊長は配慮されていた。とにかく風が強かった。寒かった。汗をかき過ぎなのであろう。汗が寒さを感じさせる原因なのだろう。「水分のいらぬ体を造らねば」と反省も束の間、早月小屋にはビールがあるらしい。ビールのためならと寒さを耐えて購入しに行ってしまった。う～んここ

が、一流と三流（特に精神的な事）の違いなのだろうか。三流いや四流は、登頂とその過程（テントの生活だとか自然との触れ合い）を楽しむことの両方をバランスを取りながら求めてしまう。程々に。だから中途半端に一流と同じようになるとどこか違和感が生まれる。決して困難を避けている訳では無くて。また、楽しさだけを求めているわけではなく。当然遭難も念頭において。

（このバランスを取るのに、超一流の技術がいるんだけど）一流にならない（なれない方が多いんだけど）、三流でいるための覚悟みたいなものもあると思う。急に一流になろうなんて。一流に失礼だなあと思うこともある。だって一流の人って何かを犠牲にして（犠牲と思っていないかも知れないが）にして、血のにじむようなトレーニングとか修業しているはずだから、まあ言い訳はこの程度にして……。なんだかんだ言ってもビールをおいしく飲んだのでありました。

今回携帯用のテレビ（セイコー製）を持ってきました。稜線ではなかなか綺麗に映ってました。予報では明日は天候が悪いとのことであった。この時我々は残された時間に限りがあるということに少しづつ気づき始めたのであった。相変わらず外は風雪が吹き荒れていた。

松尾平（7:45）－早月尾根（15:50）

12月30日（土）雪 停滞

晴れていればアタックである。ところがホワイトアウトであった。今日は停滞を余儀なくされてしまった。『まずい、食料がまずい』古山隊長が呟いた。今回の食料がまずいではなくて、我々が背負ってきた食料は4日分である。つまり足りなくなってしまうということである。残りはこの早月小屋付近にデポしてあるのである。つまり今日中に、デポした食料を見つけださないといけない。明日の夕食分までしかないのだから。

早月小屋の付近は我々より先に入山しているパーティが2つあった。下にベースを構える明大ともう一つは、名前は分からなかった。名も知らぬそのパーティは、ずっと停滞していたとの事。そして明日晴ればアタックで、駄目なら下山ということであった。明大は、早月小屋には雪洞を確保していた。そしてここより上の最終キャンプが2400m付近にあるが、そこから先は胸近くの雪があって先へ進んでいないとのことであった。しかし、彼らに停滞の日はなく必ず下から早月小屋まで来るのである。そして雪洞を修理して帰っていった。告隊員は大変感動を覚えたらしく、下から激しいラッセルで登ってくるにもかかわらず、『鼻歌混じりで歩く奴がいる』と言って本人も同じ曲をまねして何度も口ずさんでいた。

早月小屋周辺は、おそらく7～8m、多いところでは10m以上の雪があったと思われる。デポした当時1番背の高い木の根元に結びつけたらしいが、その木が何処にあるかさえも検討がつけられなかった。交替しながら4時間ぐらい掘ったのでしょうか、しかしながらその陰さえも見ること出来なかった。この時点で敗退が確定した。

12月31日（日）晴 早月小屋～馬場島～上市

久々の晴天である。複雑な心境であった。下から多くの人がつつら折りになって上がってくる。

何故か恥ずかしさを感じる。先日出会った中学時代の恩師ともすれ違った。お二人は馬場島でトレースが出来るまで停滞なさっていたのだろう。我々は午後1時過ぎには馬場島に到着した。詰め所に探知機を返却しに行った時、二人の女性が先客としていた。ちらっと話を聞くと、遭難しなかったらしい。小窓尾根で雪洞泊をしていたが、その雪洞が雪崩で埋まったとのこと。たまたま二人は除雪をしに外に出ていたので中に閉じ込められる事はなかったようである。しかし装備は回収できず下山してきたとのことであった。さすがに疲れた様子であった。

詰め所を出た後、馬場島で泊まるか、上市もしくは庵まで降りるか意見が別れた。古山隊長は『馬場島に泊まることにしよう』と言われた。この時僕は、何故そうするのか疑問をもった。何故なら、天気がよくて、時間もたっぷりあるのにである。なぜここに停滞するのか、この時は理解できなかった。僕個人としては他の理由もあったが、ずっと剣のそばにいたことが嫌であった。しかし馬場島に泊まることに決まった。ところが、明日元旦はタクシーが営業しないとの情報を得た。設営していたテントをしまい速攻で庵まで歩いた。結局その夜は上市の車を停めていた場所で泊まることになった。

この夜はやはり騒ごうにも、楽しむにも今一つだった。あまり話の内容は覚えていないが、印象に残っていることがあった。古山隊長がうつむき加減に言った。『どんな立派な登山家でも里心があるんだよなあ、いったん山から離れると里心がついちゃって、次の意欲がなくなるんだよ』僕は馬場島での疑問が解けたような気がした。(古畑任三郎ではないが)なるほど、隊長は次を強く意識されているんだなあと感じた。すなわち、今日ここに泊まることが里心を生むと言うことだろう。明日以降も継続して登るためには、山にいた必要があったと言うことだろう。合宿中に次の山のことを意識しなかったわけではないが、個人的にはあまり乗り気になっていなかった。何処と無く古山さんの気持ちは知っていただけに申し訳ない気がした。知りながら温泉の話をしていたりしていた……。隊長は少々欲求不満気味であったと思う。(古山さ〜ん事実と違っていたらごめんさい!)他の隊員はどう考えていたのだろうか。いつの間にか振り出した雪がミゾレに変わり、暖かな大晦日の夜であった。

早月小屋(9:00)ー馬場島(13:00)ー庵(16:00)ー上市(17:30)

1月1日(月)曇り時々雪 上市〜つくば

朝から温泉を探した。道路を走りながら山を見たが、剣は雲に隠れて見えなかった。黒部の宇奈月温泉によった。その後、一路茨城を目指した。何処を走っても正月の雰囲気は漂っていた。

冬の剣は日程を長期間確保しなければならない。食料などの装備が多くなる。当然体力も必要だろう。特に冬だけに防衛体力が必要である。精進せよということか。雲の向こうの剣岳だったらこういっだろう。『当たり前じゃないの、だけどまた来てね』

上市(8:00)ー宇奈月温泉(9:30)ーつくば(17:00)

(坂本 記)

1996' 焼岳一冬合宿“白昼夢・カイルスの幻”

1995. 12. 31~1996. 1. 3

パーティ L 本図一統、大崎真奈美、生井一男

今年もまた、冬山のシーズンがやってきました。しかし如何せん。私は最近山を再開したばかりで体力に余り自身が無い。山行に行ったのも川苔谷の逆川の遡行だけだ。だから今年は家でコタツムリになってようかなあと思っていた。何故なら今回の冬合宿は、剣岳の早月尾根に行くようなことを聞いていたので、体に核爆弾を抱えている人間には、到底参加できる代物ではないと思っていたからだ。すると本図氏も日程の関係上行けないということで、何やら上高地の焼岳に行く計画が有るようで、大崎さんをしきりに誘っていた。それを私は遠巻きに見ていた。最初は、今井さんをお供にしようとしていたが、うまく取り巻きに出来なかったようで、矛先を“核爆弾生井”に向けたのだった。

焼岳は、ここ2~3年程前から登山が解禁になった山で以前は登れなかった。それを登ろうとは中々の計画である。流石は、山好き、〇〇〇好きの本図さんである。メンバーは本図、大崎、生井の3名に決まり、計画を練る。と言っても殆どが本図さんが計画、実働共にこなしてしまい、私は何もしないで、唯行くだけ状態であった。従って今年は剣岳の早月尾根と焼岳の2つに分かれて行なわれた。剣岳の早月尾根隊はともかく、我々焼岳隊の方は至って楽な山行になるだろうなあと思い気持ちは大分楽になった。

30日、午後9時。下館の市役所に集合する。大崎さんも迷わず来た。全員集合。早速、荷物を振り分ける。やはりすごい量である。まずは私がドライバーで、坂巻温泉に向け車を走らせる。上信越道を使い佐久までのつもりが、小諸まで行ってしまい、ちょっと焦ったが（高速が小諸まで延びていた）小諸から国道18号~三才山トンネルを経由し坂巻温泉に着いた。トンネルの中は車で一杯なので、トンネルの入り口の手前に停めて、軽くお酒を飲み、雑談、そして明日の好天を祈りながら寝袋に入った。

31日、早朝というには大分時間が遅くなってしまっているが、核爆弾搭載の生井、冬山初体験の大崎、何でもオールマイティの本図大御所の3名は、今宵のベースキャンプ地まで、重い荷物を背負いながらも快調に飛ばしていった。出だしの釜トンネルは足下が凍っていて、冬山初体験の大崎さんは不安定な感じで、本図氏のストックに掴まりながら進んでいった。途中何度か危なかったが、我々は、どんな危険な場所でも笑って行動できる“エキサイティング・デリシャス・アルパイン・クライミング”チームである。巷では略して“EDAC”と言うか言わないかは定かではないが……？。

単調な道を進み、上高地は大正池手前の堰堤の所の橋を渡り、焼岳の山麓をぐるっと大正池右岸道路を焼岳登山口まで向かう。この道から見る焼岳は悠然としていてすごく格好が良い。今まで何度か見てはいるんだが、今回は何かまるで違うように感じるのはどうしてだろうか。周りの

澄んだ空気の為か、久しぶりの山行の為か、体中に自然の波形が流れ込んでくるような感じの為か、等と考えながら進んでいく。

焼岳登山口の手前に水が取れる所があったので、ここで幕営する。まずはテントを張り、今宵のお宿を設立する。天気は上々、空気は澄んでる。今宵ここで過ごせる一時を神に感謝し、また次の日の晴天を祈り、3人は宴を開いたのであった。

1日、昨日の祈りもむなしく、テントの外は雪が降っている。本当は午前3時起きだったのだが、起床係が、外の雪を感じて皆を起こすのを躊躇した為？（寝坊した言い訳その1）午前4時過ぎに起床となった。外は雪が降っていてとても行動できる様子ではない。ので暫く待機状態で、朝食の用意がてらお茶を飲む。雑談をしながら時を過ごす。外も明るくなってきた。どうやら雪は止みそうである。（実はさっき起きた時、ちよいと幽体離脱して私が天上界のそのまた上のバガヴァーン・ヴァイローチャナ（毘盧遮那仏＝大日如来）に会い行き、お願いしたのが利いたようである。いつも神は我に味方する。）

8時過ぎ、時間が遅いので一応偵察という感じでベースを出発したが、あわよくば登っちゃまてな感じである。まず先頭は私、生井が勤め、大崎、本図とのオーダーで大正池右岸道路を登山口まで進む。焼岳登山口の道標より樹林帯に微かに残るトレースを頼りに、ずんずん進む。途中より樹林帯からちょっと出て、見通しの良いトレースのはっきりしている所を進む。それを少し行くと峠の砂防堰堤に出た。ここよりまた樹林帯を歩くわけだが、やはり大崎さんは、冬山は始めてなので雪歩きは辛そうだ。踏み跡にうまく歩幅が合わないようで、かなり踏み抜いてペースもダウンしてきている。私が先陣を切って行っているので大崎さんとはかなり間が開いてきてしまった。まあ、本図さんが付いているので安心だけど、遠くから見てても辛そうである。

やがて大木に5合目の看板のある所までやって来た。今までの様な楽な登りでは無く、ここから急登に変わる。大崎さんを残し、本図、生井で偵察に行く。いきなりきつい登りで尾根に取り付く所に、鉄のハシゴがかかっている。この先も急登が続くのかな？。大崎さんの状態を考えると頂上まで行けるかどうか…？時間的（ここまで5時間位かかっている）にもう帰還しないと無理かな？この先はザイルが必要になる云々。と考えた2人は大崎女史の意向を聞いて相談したのち、敗退することにした。

敗退すると決まれば、下るのは早い。後ろには微かに噴煙を上げている焼岳が美しく見える。何かどこかで見たような懐かしさを覚える。下りも私が先行する。後ろの二人に余り離れない様に気をつけながら、下って行くが樹林帯から見晴らしの良い所に出たので、気にせずピッチを上げて歩いてしまった。かなり離れてしまったようだ。姿が樹林帯から現れない。しばらくは煙草を吸ったり、あたりの景色を見たりしていたが、中々来ないのでザックを枕に昼寝を決めるとする。ウトウトしていると意識が遠のいていき、そして辺りは急に霞の中に消えていった。

『あれ、ここは何処だ』…霧の中からはぼんやりと何かが見えてきた。人だ！。人がひざまずき、体をなげうって祈っている。五体投地というやつだ。寺の門前でたくさんの人が五体投地をして祈っている。よく見るとに大昭時（ジョカンジ）と書いた看板が目についた。どうやらここは、

憧れのチベットはラサのようだ。ここで言う五体投地とは、仏に対して精一杯身を低くし、最大の礼を尽くすものである。この五体投地を何度も繰り返し、始めて仏への皈依が叶うと言われている。そんなラサを後に、進路を西に向け私は進んだ。まずはチャンタン高原目指し、ひたすら歩き続ける。すると目の前に広大な湖が見えた。ナムツォ湖（チベット語で天上の湖という）と標識が書いてある。すごく広く大きい。日本の琵琶湖の3倍はあるかな。地平線が見えるぐらい広々としている平原。雄大な大地。雲と風と大地が荘厳なシンホニーを奏でている。そんな風景の中で遊牧民と羊とヤクの群れが登ってくるが見える。彼らに近づき話をするが、その人懐っこいこと直ぐ仲良くなった。その優しい遊牧民達にお茶をご馳走になる。お茶といってもチャイというミルクティのようなものだ。そんな人懐っこい彼らと別れて、私はまた歩き出した。7000m級の山脈が連なるチャンタン高原を縫うように走る道をひたすら西に向かった。すると前方にひときわ際立ってみえる山が見えた。カイラス山だ。標高6638m。古くからチベット仏經の聖地として崇められてきた山だ。チベットの人達は、カンリンポチェ（雪をかぶった尊い山）と呼んでいる。

青く澄んだ空にボカ〜りと雲が点在している。その空の下、遠くから五体投地しながら近づいてくる人達が見える。チベット仏經で最高の礼拝とされる五体投地。チベットの民は一生に一度はカイラス山に巡礼することを願っているという。その巡礼とはカイラス山の山肌に（五体投地）身を投げ出し、その痛みや苦しみを克服していくものである。これも苦しみを伴えば伴うほど願いが叶うとされるチベット仏經の教えなのである。そのカイラス巡礼路は、カイラスを一周する約50数キロ。これを五体投地して行く訳である。一周するのに約2週間以上かかり、並の信仰心では出来るものじゃない。やってみようかと、真似をするが肘、膝をぶつけて上手くいかない。巡礼の格好も手にはオープンで使うグローブの様な物に板が取り付けられている物を使い、体にはエプロンの中に綿か何かを入れているやつをかけている。こんな重装備でなければ、とてもカイラス一周なんて体がいくつあっても足りないと思う。こんな事をして50キロの道を行くかと思うと気が遠くなる。この五体投地もよく見ると人により違いが見える。きちんと1で、頭で手を合わせ、2で足を曲げ、3で体をなげうち、身長の高さ+手の長さだけ進む人。歩きながら頭で手を合わせ、ヘッドスライディングのようにして、身長の高さ+手の長さ+滑った長さだけ進む人。この方が約2倍は距離が稼げる。これなら2週間以上かかるのを半分で済むだろう。だからと言って信仰心が薄いとは私は思わない。

巡礼者の後を追うように行くと、カイラス山の麓にあるマナサロワール湖に着いた。山々の懷に清く済んだ湖。まさにシャングリラ（理想郷）が現実にはチベットの何処かに有るじゃないかと思ひ込んでしまう光景だ。『ああ！素晴らしい！』心が開放される思いである。マナサロワール湖に映るカイラス山をずっと見つめているとまた霧に包まれて行った。

目を開けると、青い空、そして焼岳が見える。うたた寝をしていて幻を見たようだ。本図さんと大崎さんは、まだ姿を見せない。焼岳を見ていて、カイラス山とダブったようだ。だから幻を見たのだろう。

ようやく二人の姿が見えた。大分よれてきているかと思ったら、大崎女史は元気。元気一杯に近づいて来る。その後ろを本図さん。合流して一息を入れる。帰りは樹林帯を通らず、ここより真っ直ぐに大正池右岸道路に向かってズンズン戻っていく。また途中より私が先行してテントをウォームアップしておこうと健気な思いを胸に秘め、一人ひた走るのであった。

テントに戻りコンロを焚き、暖かくする。そうこうして二人が戻ってきた。今日の山行を肴に酒を酌みかう。明日もう一度挑戦しようか等と酒を飲みながら夕飯前の一時をそんな話をする。楽しく充実した山行で宴もどどまらない様だが、睡魔と今日の疲労が心地よい眠りへと誘っていった。

2日、今日の天気はまあまあであるが、まずは今日の山行計画を考える。討議の結果、焼岳はバスし西穂山荘を経由し、独標まで行こうという事に変更になった。

昨日とは変わってポピュラールートなのでトレースのしっかりしている事、まるで舗装されている様な感じである。ここなら登りもバケツ状態になっているから大崎さんも大分楽であろう。今日も先行は私、エノラゲイこと核爆弾生井が疾風のごとく登って行く。途中どこぞのスタッフらしい人たちがテレビカメラを私達の方に向け、颯爽とした登りを取っていたようだったが？。天気もよく、大汗をかいてしまう。あまり暑いので上着を脱ぎ、また登り出す。登りに飽きた頃ようやく西穂山荘に到着した。流石に人、人、人、で一杯である。よくまあ、こんなに人が登ってくるなあ、感心、感心の一言である。山荘の入り口でザックを下ろし、大崎女史と本図大御所の2人を守つ事少々、直ぐ合流し山荘で休息する。ここで漁夫の利というか？大崎女史の恩恵というか？私も大御所にコーヒーを馳走になる。しばらく体を休め、英気を養う。準備OK！いざ、行かん、雪煙たなびく独標へ！と登り始める。登り詰めたピークで休憩し風景を堪能する。360°すべて見渡せる。絶景である。独標方面は雪煙たなびき寒そうである。よく見るとどうも雪煙が“今日はもう打ち止め！今日はこれにて終了とさせていただきます、また今度の来山を西穂、奥穂共々お待ちしております”という感じでたなびいている。どうも今回もタイムアウトになってしまったようだ。仕方ない。終了したんじゃしょうがないなあ。降りようかい。てな具合で西穂山荘からベースまで降りて行く。途中でオコジョが挨拶に来るが、恥ずかしがり屋な奴は一回しか出てこなかった。今日も暖房係の私は、二人より先に降りてテントを暖かくしておく。まるで織田信長の家来だった木下藤吉郎（豊臣秀吉）の様である。

今宵は最後の夜、酒も進み、話も弾む。夕食も美味しかったのだが、殆ど私が酒の肴にしてしまった。一度の山行で2回敗退は、2年前の笠ヶ岳以来だ。あの時はひどかった。ピツパピツパにパンツまで濡れてしまって後続と合流後、大乾燥大会になってしまった。それから比べれば極楽であるが…。3人で話も盛り上がり、酒も進みいつの間にか寝てしまったようで、気がついたら朝になっていた。

3日、早朝の清々しい中目が覚める。朝食後、撤退の準備をする。今日は天気も午後から崩れてきそうだが、我々が帰るまでは天気は持つだろう。焼岳をず〜っと見ながら帰り道に行くが、何か焼岳が微笑んでいるように見える。まるで『今回は遊んでやれなかったけど、また来いよ。』

その時はゆっくり遊んでやるから』と言っているように見える。

そんな優しい焼岳を後に、一路茨城に向かう“EDAC”こと“エキサイティング・デリシャス・アルパイン・クライミング”チームであった。

12月31日

坂巻温泉(9:40)－焼岳登山口ベース(13:03)

1月 1日

ベース(8:46)－引き返し点(13:01)－ベース(16:00)

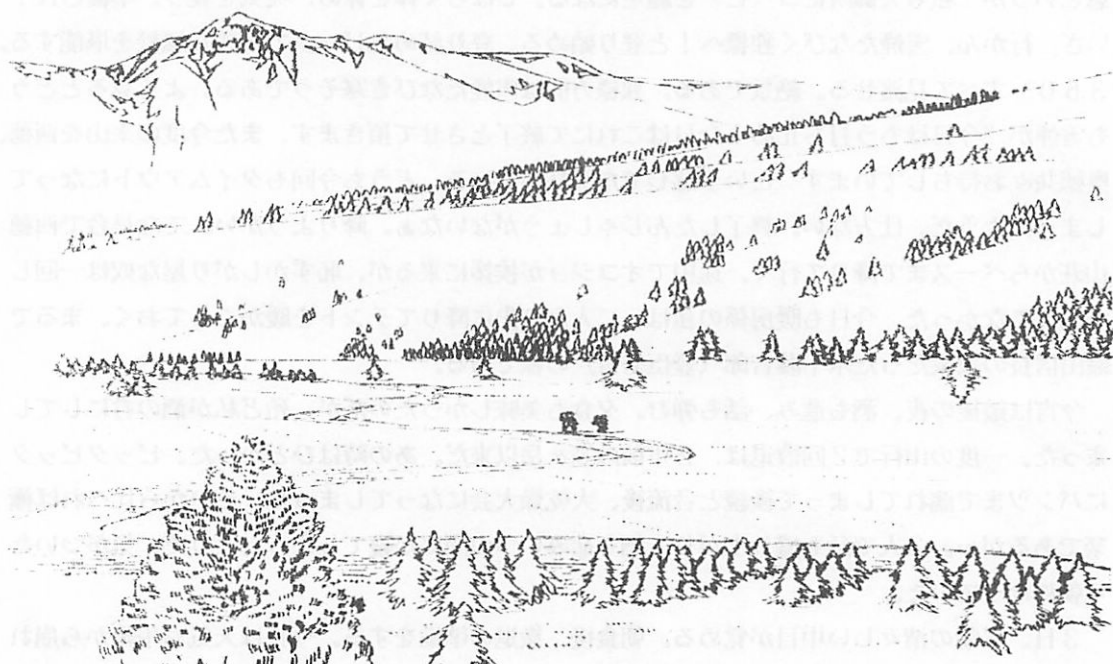
1月 2日

ベース(5:28)－西穂山荘(11:56~12:26)－展望台(13:10~13:20)－ベース(16:30)

1月 3日

ベース(10:34)－坂巻温泉(14:00)

(生井 記)



月例山行復活か？

5月末日の深夜、CL古山から電話が入った。用件は会の再建計画についてであった。CLは会再建計画について自分の考えを得々と語った。

現在当クラブにはリーダー会がない。リーダー会の代わりに3役会というものがあるが、役員は、代表、事務局、CLの3人だけである。代表は会の総括責任者、事務局は会計等の庶務、CLは山行計画等、会行事全般の管理責任者になっていることは皆さん承知のはずだ。当然3人だけで会務全般を処理するのは無理なので、元役員が手助けすることになっている。

古山の再建計画は、新人と入会后3年以上経ってもザイルのトップにたてない者の技術をアップさせる。そのため現在不定期になっている会山行を定期山行に復活し、会員を強制的に参加させることによって底辺の底上げを図る。一部の会員はクラブへの愛着に乏しく、会員同士の連帯感に欠ける者がいるので、個人的レベルアップだけではなく、会員の連帯感を強め、クラブ全体のレベルアップを図る。会山行は月一回行い、それに参加しない者は合宿に参加させない。今度の正月合宿は滝谷登攀とし、それに見合った会山行を計画する。というようなものであった。実は古山の考えは、さらにもっと厳しいものであったがここでは伏せておく。

その昔、週休2日などは夢また夢の時代、職人をしている人は第一と第三の日曜日しか休みはなかった。その頃のACC-J（東京）は、第一第三は会山行日であった。だから職人達は会山行でしか山に行けなかったが不満が出た記憶はない。それだけ会山行が充実していたのかもしれないが、ゲレンデであろうと本チャンであろうと山に行ければ嬉しい時代ではあった。10数年前までは当会（茨城）でも年間山行計画を立て、毎月会山行をしていた。しかし、種々なる事情により月例山行は自然消滅してしまった。月例山行復活は待ちに待っていた感もある。不定期の訓練山行しかない会山行に一抹の寂しさを感じていた私には嬉しかった。

私は、冬の滝谷は今度の正月では技術的に無理だろうから、その次の正月にしたほうが良いのではないかと考えた。会山行は強制的参加ではなく半強制的位にトーンダウンしたほうが良いのではないかと、自分の意見を述べた。それは我々の登山はあくまでも趣味であり、会山行は日曜日が祭日になるので、日曜日が休みではない会員のことも考えて、本人の自主性を尊重すべきと考えたからである。CLの考えは、そうすると元の本阿弥になると言っていたが、確かにそうなる恐れはある。私は、一応大人の集団なのであるから、そこまでやるのはどうかと思ったのである。休みが合わない者は、それに見合った個人山行をしてもらわないと困るのだ。その他の事についてはCLの考えに賛成した。

先日、事務局長に電話をした。元役員は手助けのみにすべきとわかっているのだが、つつい酔った勢いで口を出してしまった。断られると承知しつつ“3年以上経ってもザイルのトップを引けないような奴は全員クビにしろ！おめえ事務局長だろ、ビシッとやれビシッと！”と実名をあげて申し込んだ。当然やさしい事務局長の返事はNO。本心、私も現在の返事はNOで良いのだ。もし事務局長がYESと言ったら、ちょっと待てよ、と言ひ出したかも知れない。ただし、現在の所という条件付きである。会員はみんないい奴だし、みんな好きな奴ばかりである。会員

を除名するのは辛いことである。しかし、会を存続させるためには時と場合によっては、いたしかたないこともあるのだ。

わらじの仲間の若林氏が“山岳会というものはギブアンドテイクの団体だ”と言っていたように記憶しているが、私も同感である。なぜ手弁当で貴重な休みを使って新人訓練に行くのか。その答えは実に簡単明瞭である。一日も早く自分のパートナーになれるよう成長してほしいから。一日も早く会を背負って立つクライマーになってほしいからにはほかならない。世間には登山技術を習得するのにプロの講習会に参加する人もいるだろう。プロは何万円かのお金を戴いて生活の糧にしているわけだから、なにも講習生に短期間で一人前になってもらう必要はない。講習生も後輩の面倒をみる義務はない。ここが講習会と山岳会の根本的に違うところなのだ。私も先輩にタダで教わってきた。だから私も後輩にタダで教えるのだ。ギブアンドテイクというのはこのことである。したがって逆に言えば後輩は短期間で一人前にならない義務があるのだ。そして自分の後輩にはタダで教えなければならない義務があるのだ。でなければ山岳会は継続していけない。この努力を怠った会は必ず消滅する。ここで、俺は入会した時既に登れたんだから、新人の面倒をみる必要はないという奴がいたとしたら、それはACC-Jに入るのが間違っている。すぐに退会してもらいたい。こんな奴は同人組織のクラブに行くべきだ。登山のABCを山岳会で教わって、その後同人に移ってしまうというとんでもない輩もいるがこれは論外。自分がクラブに入ったのは山に連れて行ってもらったためだ、という奴は当会には間違ってもいないと思う。連れてってもらったのではなく、一緒に行くという気持ちがなければ、おんぶに抱っここの山行はいつまで経ってもなくなならない。さて、3年以上経ってもフォローだけの奴は義務を果たしていないことになる。つまり入会以後テイクオンリーなのである。テイク時代を卒業できず、ギブ時代に入れない。新人を連れて行けない。金魚の糞みたいに今でも先輩にくっついて行くだけしかできない。それはなぜか。この答えも実に簡単、あまり山に行かないからである。山に行ってもハイキングばかりではだめだ。当会がハイキングクラブでないことは入会案内にも明示してある。岩登り、沢登り、冬山等、本格的登山がしたくて当会に入ってきたはずだ。当会にも初心に戻ってもらいたい者が若干名見受けられる。

会に長年所属し、一時期はクラブの中心となって活動していたが、家庭の事情等で山に行けない人と同じく考えられては困る。誰だって齢をとれば、行きたくても行けない時期はあるし、行けても厳しい登攀はできなくなる。百名山ハンターやハイキング専門になってもそれはそれで素晴らしいことだ。なぜ会をやめないかという、彼らはクラブに愛着を持っているのである。会を去りたくないのである。クラブの発展を祈って、年12000円の会費や年6000円のOB会費を払ってくれているのである。彼らは既にギブの時代を卒業した、つまり義務を果たした先輩たちなのである。

1998年正月の滝谷登攀合宿に向い、会員一丸となって月例山行を成功させようではないか。

(本図一統)

金峰山

1996. 1. 3~4

パーティ L 今井弘、他3名

会の冬山合宿に参加したかったのだが休みが取れなかった。休みは1月3日と4日の二日間だけ。家にいても仕方ないので山友達に『何処か行きませんか』と声を掛けた。『それじゃ、山で新年会でもやりませんか』と6名が集まった。なるべく人のいない様なマイナーな山にしようと友人が言った。新年会に必要な酒とおせち料理は各自持ってくる様に決めた。

朝6時半に柏駅を出発して廻目平に11時に着いた。3時間で金峰山小屋に着いた。ついでに五丈岩も登った。金峰山小屋は、22~3歳位の林綾子さんと言う方が管理人をやっておられた。数年前父親を亡くし後を継いでいるそうだ。

小屋には我々6名の新年会隊の他、15名位の宿泊客がいた。14時剣岳と焼岳に登っている人たちに悪いと思いながら、酒とお節料理と雑談の怠慢な世界に突入していった。(小屋からも酒とおつまみが出た。)

翌朝、食欲が無かったが無理矢理朝食を食べて2時間で廻目平に着いた。帰り海の口温泉に入って汗を流し、19時頃自宅に着いた。

(今井 記)

今回報告できる山行が無いので肩身が狭いです……。私事ではありますが、ACC-J茨城に入会して1年近くになろうとしています。そしてふと気がついてみると、年間山行回数ははるかに凌ぐ量のうず高い書籍の山……。 (もちろん山関係の)

私でさえこういう状態なのに他の皆さんはどうなさっているのか……。週刊誌や新聞じゃあるまいし、まさか捨てているということもないでしょうし……。家が広くて困っているという方は別ですが、他人事ながら雪崩事故が起きないことを心からお祈り申し上げます。

えっ!! そんな本読んでるヒマがあったら山に行ってる?。 ごもっともです。

(大崎 記)

ウメコバ沢アイスクライミング

1996. 1. 7

パーティ L 古山正文、告広道

前日の1月6日、深夜。足尾の町を少し外れたダムの駐車場に TENT を張る。夜だということにあまり寒くなく、滝がちゃんと凍っているか心配しながら寝る。

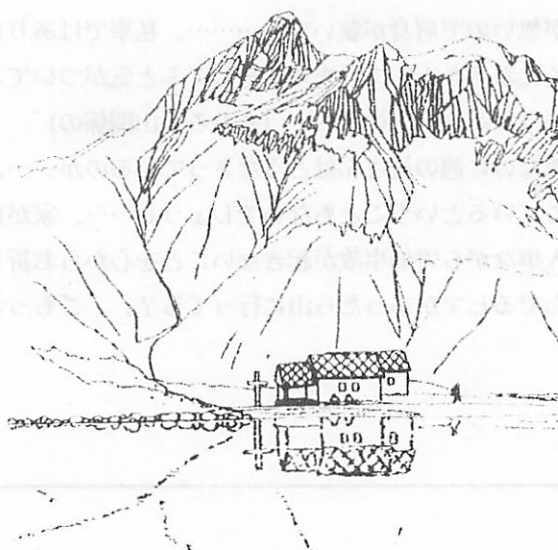
翌朝、ウメコバ沢に車で向かう。ゲートを少し越したところで東京から来た数人のクライマーが乗った車が雪でスタックしており、引っ張り出してやる。勢いに任せて雪道を行くがどうにも雪が多すぎるので、途中で車を乗り捨てて歩いてウメコバ沢を目指す。

R7 から登るが、自分はアイスクライミングは初めてで、アイスパイルと長さ 60 cm のピッケルで登ったが、どうにもピッケルが長すぎて具合が悪いし疲れる。滝は完全に凍結しておらず、既にここでビショビショになってしまう。ここで私は重大な失敗をしまう。古山氏との話の取り違いでアイスクリューの数が少ない。アイスクリューを 4 本も残置してしまった。ここから先は 50 m の滝がひかえているというのに！。

次の R8 では支点が余り取れなかったので、古山さんはさぞや緊張したでしょう。どうもすみませんでした。その後 5 m、2 段の滝を 2 つ越して終了。残置したアイスクリューを回収して帰途につく。

取り付き (1:00) - 終了 (14:00) - 車 (15:50)

(告 記)

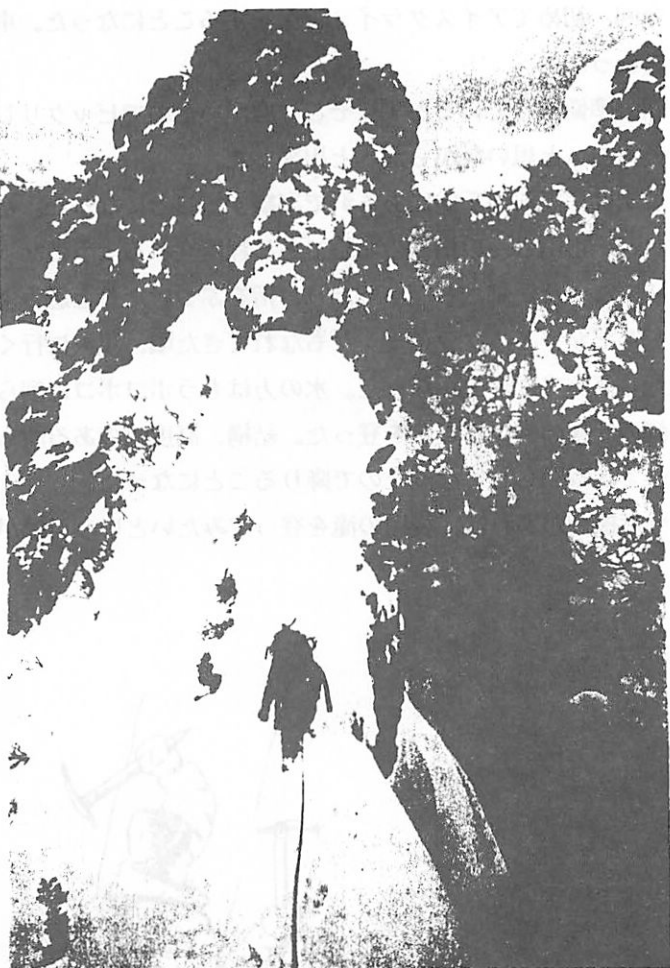


谷川岳一の倉沢一の沢左稜

1996. 1. 14

パーティ 1本図一統、告広道

積雪期の一の倉沢に入るのは今回が初めてなので、壁がどうなっているのか期待しながら出合に向かって歩き出した。1月だというのに暖かいし、雪も締まっていて歩きやすい。結局、出合までワカンを出さないで行けてしまった。出合で一服し本図氏と『雪崩でもでないかあ?』と話している最中に、3ルンゼ辺りで小規模な雪崩が起こった。気を引き締めて、一の沢左稜を目指し森林に入る。途中で踏み跡にぶつかり辿って行く。岩稜に出る少し前に、ビバーク跡があった。だいぶ傾斜がきつくなってきたので、ここでアイゼンとハーネスを着ける。やせた岩稜に出て、ここからが核心部になるが、途中で踏み跡はマチガ沢側に下りており、ここで自分たちも下るか相談するが、まだ時間もあることだし最後まで行こうと言うことになり先に進む。やせた岩稜に不安定に雪が乗っ



核心部のナイフエッジ

ているので、時々足を乗せた雪が崩れてバランスをくずしてヒヤヒヤする。結構高度感もあるとこだ。懸垂を1回行ない、又やせた雪稜を慎重に行き懸垂でシンセンのコルに出る。ここで食事にする。一の沢を下るつもりだがまだ日が高く、雪崩が恐いので日が暮れるのを待つ。マチガ沢をスノーボーダーが下っていくのが見える。日が暮れてから下ったが30分程度で出合に着いてしまった。翌日スキーに行く本図氏を湯檜曾駅に下ろして帰途についた。

駐車場(6:30)――一の倉沢出合(7:43)――左稜取付(7:56)――稜上(9:40~9:49)――
シンセンのコル(12:40~13:29)――一の倉沢出合(13:57~14:09)――駐車場(15:31)

(告 記)

松木沢・黒沢&無名沢（アイスクライミング訓練）

1996. 1. 28

パーティ L 古山正文、笹平孝

今回、初めてアイスクライミングをすることになった。車で行ける所まで行って、そこにテントを張った。

朝、準備をしているとすぐそこに鹿がいたのでビックリした。最近、猿も鹿も人間に慣れてきているなあと思いながら沢へと出発した。

まずは、黒沢の手前にある沢で訓練することになった。初めはなかなか要領をつかめなかったけれど、古山さんの指導のお陰である程度登れるようになった。でも、バイルの突き刺し方は難しくてなかなか刺さらなかったり、指をぶついたりと思うようにいかない。

だんだんアイスクライミングもなれてきた頃、黒沢に行くことになった。既に他のパーティの人たちがいてにぎやかだった。氷の方はもうボコボコに削られて階段状になっていたの、その右側の状態の良いところを登った。結構、高度感のある所もあったけど、とりあえず上の方まで登って、時間もなくなったので降りることになった。

今後機会があれば、袋田の滝を登ってみたいという目標が一つ増えた。

(笹平 記)



ダブル・アックス

袋田の滝（四度の滝） アイスクライミング

1996. 2. 4

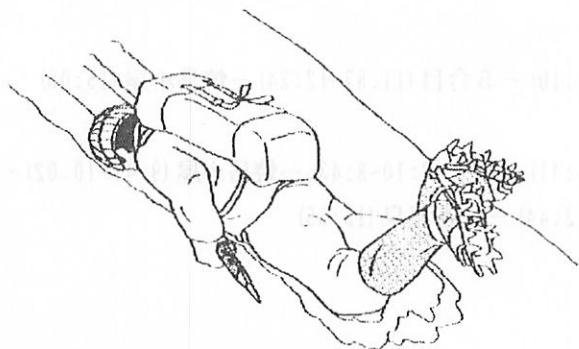
パーティ L 古山正文、本図一統

ここ数年完全結氷していなかった袋田の滝が完全結氷しアイスクライミングが可能らしく、しかもその様子がテレビで放映されたい。二人とも午前10時には家に帰らなければならず、朝一番のやつつけ仕事で登ることにした。

前夜千代田町役場に集まって、深夜滝の前の商店街につく。街はずれの道路端に駐車する。なぜか解らないがキャンピングカーが2台駐車していた。まだ辺りの暗い6時に出発する。トンネルを通過してテラスにでる。テラスの柵を乗り越えて沢に降りる。下りたところはすぐ取り付けである。滝正面の展望台には大勢のカメラマンが待ちかまえていて、カッコ悪いところはみせられないと、ピッケル、バイルを握る手に思わず力が入ってしまう。一段目の滝は中央凹角から右を、途中スクリュウハケンを一本打ってカメラマンにサービスして、滝上でビレーする。二段目の滝は水が少ないと右側か左側にしか流れがないのだろうか、中央部分にはまったく氷がない。われわれは、左側の氷を登ることにして取り付け。氷はくらげ状態またはカリフラワー状態で快適とはいえない。途中やはり一本スクリュウを打ち、左壁の懸垂ボルトでビレーを取る。三段目の滝は本図さんが中央を登る。ここでクライミングは終了である。4段目の滝は50cmだからである。。この頃になると後続パーティも登り始める。左岸の登山道に戻る。滝の下には早朝にもかかわらず多数のクライマーが集まっていた。ここは標高が低く、日当たりがよいので、氷の溶ける前の早朝クライミングが定石なのであろう。

取り付け(6:30)ー終了(8:00)

(古山 記)



焼岳山行

1996. 2. 11~12

パーティ L本図一統、生井一男、名雪博二、松原丈夫

本図氏から名雪氏へ焼岳に行かないかと連絡があり、それに私も一緒に参加させてもらった。

本図さんと山に行くのは、26年前の鹿島槍合宿以来だと思う？。坂巻トンネルで待ち合わせする事した。トンネルの中は雪と車で一杯だ。

次の日、早朝、焼岳に向かって出発した。暗い釜トンネルを出ると、上高地方面が見えてきた。初めての冬だ。『素晴らしい』の一言だ。茨城の正月合宿の時は、トンネルの中は凍結していて大変だったそうだ。

今回はノルデックスキーとかプロみたいな写真家がたくさんつめかけてきた。我々も同じだが。大勢の写真家が同じ快晴の岳沢方面をアングルに、カメラを向けていたので我々もパチリと。大正池の手前の橋より焼岳方面に行く。橋を渡って少し行くとテントが一張りあった。今回は無料？のガイドがついているので楽だ。ワカンを着けて峠沢を左岸より登る。膝ぐらいのラッセルで進む。

正月は五合目辺りまで登ったそうだ。今回は何処まで登れるか？。梯子のある急登をラッセルで越え、沢状の所をザイルを出してトラバース、デブリもあり、時折塵雪崩のある少し嫌な所だ。何とか通過して広くなった斜面を稜線を目指して登ると焼岳小屋が見えてきた。今晚は小屋のそばにテントを建てる。暖かいテントの中、ついつい昔の話に話が咲き、お酒もすすんでしまう。そんな昔話をしながら眠った。

朝から快晴で風も少し有る。小屋の前にデポして裏手から頂上を目指す。展望台から旧中尾峠に出て露岩の尾根を急登すれば、やっと頂上に出た。西に笠ヶ岳、北に穂高連峰、南に乗鞍岳と素晴らしい展望だ。次はスキー登山で乗鞍岳へ名雪氏と登ることを決めて下山の途に着いた。

今回は何年も一緒に登っていないのに素晴らしい山行ができました。

本図様、本当にありがとう。

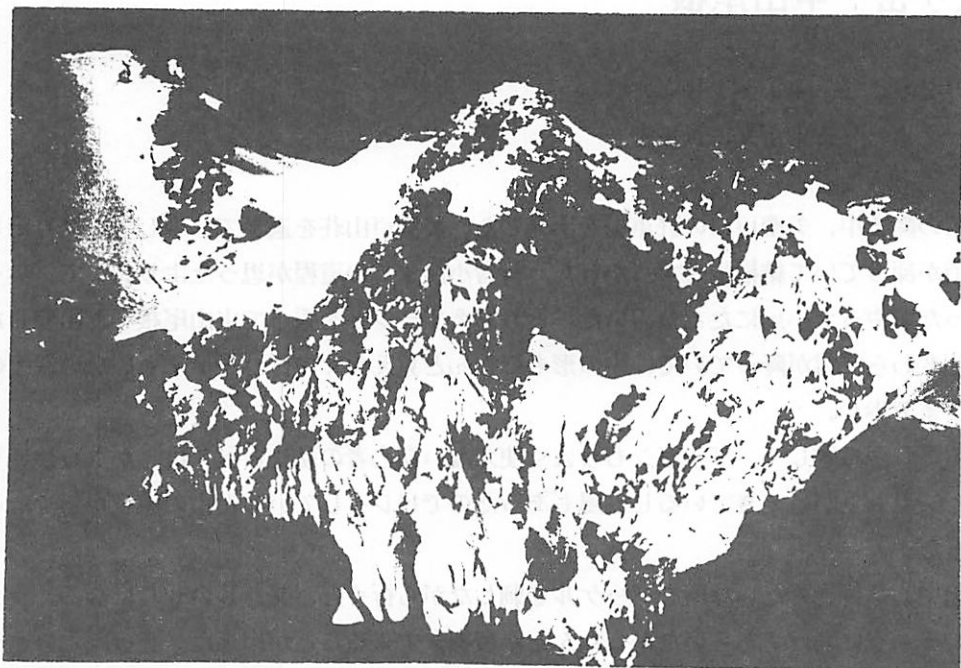
2月11日

坂巻温泉(7:10) - 5合目(11:57~12:24) - 焼岳小屋(15:05)

2月12日

焼岳小屋(6:41) - 頂上(8:10~8:43) - 焼岳小屋(9:41~10:02) - 5合目(11:00) - 橋(12:27~12:44) - 坂巻温泉(13:55)

(松原 記)



底の見えない焼岳火口



焼岳頂上にて

八ヶ岳・中山尾根

1996. 2. 17~18

パーティ L古山正文、笹平孝

雪の降る中、美濃戸口の駐車場を出発した。美濃戸山荘を過ぎて、少し急な登り出しの辺りから道が凍っていて結構歩きづらかった。行者小屋までの道程が思ったより長くて、歩くのが辛くなった頃やっと小屋にたどり着いた。とりあえずテントを張って中山尾根へと出発した。

相変わらず雪が降っていて、山の形もほとんど見えなく先行パーティもいない新雪の中を取り付きまで歩く。

出だしから難しく、アイゼンもうまく使えない初心者私にとっては、かなり恐い登りとなった。気温も下がってきているし、風もあったのでビレイしていると指の感覚が無くなるくらい寒かった。

途中、草付きみたいな所をピッケルを刺しながら行くと、又難しい登りになる。シュリングやヌンチャクに助けてもらいながらなんとか稜線まで来ることが出来た。登ったという充実感がいっぱいになった。それと途中でエビの尻尾を見られたので少し感動した。(エビの尻尾とは、どういうものか前から気になっていた) 気温が低く、風が強くなってきたので急いで地藏尾根を通してテントへ下った。ビールを買いに小屋に行ったら、中国人たちであふれかえていた。

次の日、雪はまだ降っていてピッケルもメットも完全に雪の中に埋まっていた。この日は阿弥陀岳・北西稜に行く予定だったがワカンを持ってこなかった為、3時間ほど登ったところで腰ぐらいまで雪にもぐって進めなくなってしまう為引き返すことになった。

そしてテントをまとめて駐車場へと下った。

2/17

駐車場(6:00) - 行者小屋(9:20~10:00) - 取り付き(11:00) - 稜線(15:00) - テント(16:00)

2/18

テント(6:50) - 下り(1:00) - テント(11:00) - 山荘(14:00) - 車(15:00)

(笹平 記)



谷川岳天神尾根

1996. 2. 18

パーティ L本図一統、生井一男、大崎真奈美

下館に集合した。21時頃には、雪が本格的に降り始めていて高速道路の速度規制や通行止めなどの情報がラジオより流れていたのですが、本図さん生井さんの同行なので安心して広いデリカの後部座席を独り占めしておりました。

谷川ロープウェイの発着所のパーキングで恒例の寝酒タイムを過ごし仮眠をとりました。

翌朝、ロープウェイに乗り込み、天神平スキー場で降り、そこからリフトで、1時間程度かかる道程をショートカットさせていただき、終点より滑り出すボーダーさん達とは別方向に歩き出しました。

薄曇りの空の中、山々の尾根を眺めながら本図さんによる“山用語の抜き打ちテスト”に答えたり、赤い旗の由来を聞いたりしながらの登りでしたが、それも束の間で付近の視界も悪くなり、風雪も強くなってきました。目出帽から出ていた髪と眼



谷川岳山頂にて

鏡がカチカチに凍ってしまい、頂上の標示板のある所まで来た時には余裕はなくなっていました。頂上で記念写真を撮っていただいて、肩の小屋に戻りました。肩の小屋に入ろうとすると、入り口ドアの内側に雪が積み重なっていて開かず窓から入ると、少々急ぎ足で歩きました。

小屋の外は相変わらずで、視界の無い中の下山になりました。本図さんに自分の踏み跡以外に行かないように離れないで来なさいと指示されて、少々急ぎ足で歩きました。途中、雪洞が掘ってあったので、そこで熱いシジミ汁とコーヒーをご馳走になりました。(たいへん有り難かったです…♡)

ロープウェイの終点駅より、本図さんはスキーで滑走。生井さんと私はロープウェイで降りることになり、はるか上空から華麗な滑りを拝見させていただきました。窓が開かなかったので、雪玉の爆撃が出来なかった事に生井さんは大変残念そうでした。

そしてパーキングで落ち合って、帰途につきました。

天神平(9:08)－頂上(12:08)－熊穴沢避難小屋付近雪洞(13:16~14:13)－天神平(15:13)－土合口ロープウェイ駅(16:00)

(大崎 記)



肩の小屋にて

吾妻連峰縦走

1996. 3. 6～7.

パーティ L 古山正文、今井 弘

3月6日の東北道は白河から雪がぱらついてきた。須賀川をすぎると雪は益々降ってきた。雪明りの福島駅で明日の始発バスの時刻と駐車場を確認して仮眠した。

6時27分発、高湯行きバスに乗る。坂道を進むにつれ風と雪が強くなってきた。7時24分約1時間で高湯に着いた。バスから降りると3月とはいえど真冬のような寒さだ。バス停から約1時間歩いて吾妻スキー場に着いた。リフトの始発は8時半、我々は8時40分にリフトに乗ることができた。リフトの係員が三日前山小屋に行ったときは膝位の雪があったそうでそれから毎日降っているから腰位あっても知れないと言っていた。9時16分スキー板にシールを付けて歩き始めた。スキー板は膝下位沈んだ。天気はいつの間にか青空が広がり家形山もはっきり見えてきた。五色沼の所でスキー板がスルリと横に滑った。シールが剥がれてしまった。それから何ども剥がれてしまいペースが極端に遅くなってしまった。古山さんのストックに巻いたガムテープで補強して二セ烏帽子山と烏帽子山のコルでビバーク、予定は烏帽子山なのである。私のために遅れてしまい申し訳ないと思う。

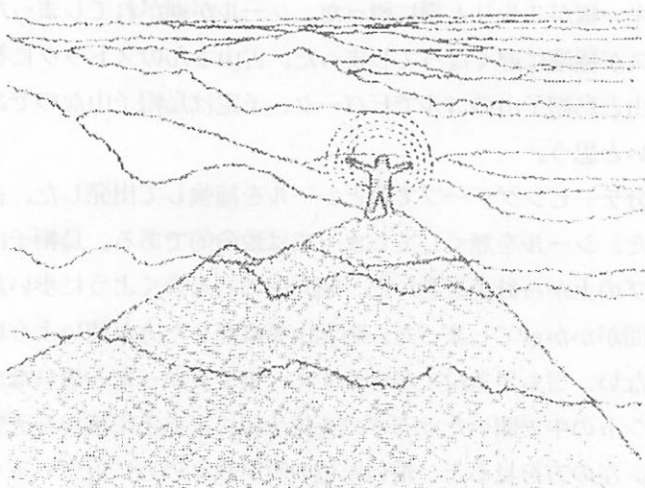
3月7日、6時20分テーピングテープで板とシールを補強して出発した。古山さんのガムテープもなくなってしまった。シールを無くしてしまっただけでは致命的である。烏帽子山の登りでも幾度も外れた。今度はテープの上から針金を巻いた。昭元山の右を巻くように歩いた。東大願と昭元山のコルにでるのに時間がかかってしまった。昭元山を直登した方が速いように思う。9時半東大願、天気は良く風もない、雪も足首位で歩きやすく、来て良かったと思いながら歩く。10時46分藤十郎、昨日テントの中で聞いたラジオの天気予報によると午後から天気が悪くなると言っていた事を思い出した。左の方を見ると、重い灰色の雲が我々の方に近づいてくる、気持ちが焦る。中大願、10時30分。天元台へ下るか若女平コースを滑るか、古山さんが私に相談した。時間も余裕があるし、心配した天気も持ちそうだし、ここまで来て滑らないのも後悔するだろうし、また来て滑るのも時間とお金の無駄だし、では若女平コースを滑ろうかと私が答えた。すると滑ろうの言葉を待ってたかのようにニコニコ笑いながら、行きましようと言ってくれた。12時に若女平コースらしき入口に入って行った。とてもシールを外して滑る状態ではないのだ、樹氷の間隔が狭く凸凹の落差が1m位あるのだ。14時5分若女平。古山さんはシールを外した。私はシールを付けたまま歩いた。15時40分舗装道路にでた。空は曇りでどんよりしているけれども計画が成功した嬉しさで、心はルンルン晴天なのだ。17時35分米沢行きのバスに乗る。車窓から吾妻連峰が見えた。よく歩いたものだとはんやりと他人事のように眺めていた。

コースタイム

3/6 スキーリフト (9:10) - 家形山 (14:00) - ニセ烏帽子と烏帽子のコル (17:00)

3/7 ニセ烏帽子と烏帽子のコル (6:19) - 東大願 (9:30) - 藤十郎 (10:46) - 中大願 (11:30)
若女平コース入口 (12:00) - 若女平 (14:05) - 白布温泉 (15:40)

(今井 記)



八ヶ岳横岳大同心南稜

1996. 3. 10

パーティ L 古山正文、本図一統

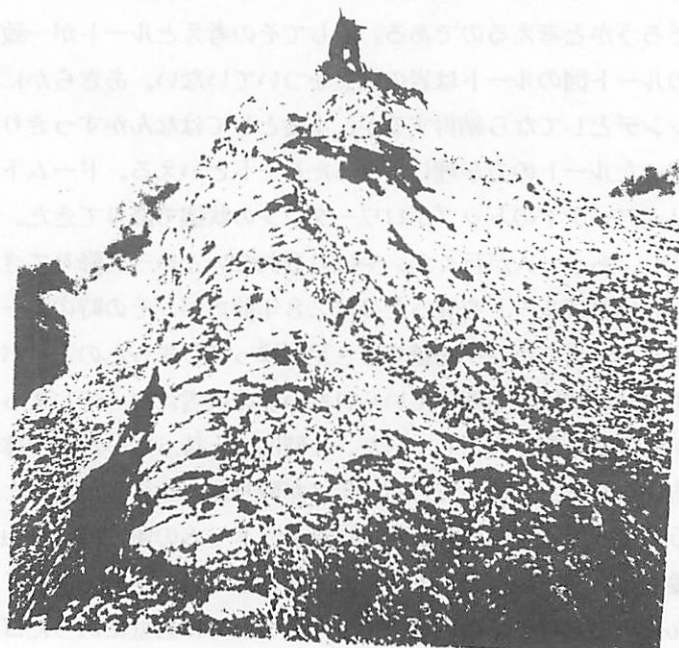
美濃戸口から美濃戸への道は、12月の時とうって変わってボブスレー状態になっていた。2年前のあの悪夢が脳裏をかすめるが、歩くのはいやなので行くほかあるまい。例の魔のカーブには、転落防止用に路肩に大きな石が並べられており、ここでの事故の多さが想像できる。いつも利用している美濃戸山荘の駐車場は、雪のため入れないので赤岳山荘の駐車場に止める。

3ヶ月前の12月にも、古山と大同心正面右ルートに登ったばかりなのに、又来てしまった。大同心は過去に北西稜と正面雲稜ルートを登ったことがあるので通算4回目だ。正直のところ大同心はもうたくさんという気持ちもあるが、南稜なら行ってもいいかという気が起きてくるのだから、やはり病気というしかない。

取り付きまでは赤岳鉱泉で小休止しただけで2ピッチで着く。壁はエピノシッポで真っ白だ。古山リードで取り付くが、どうもルート図のルートとは違うようである。残置ハーケンもあり登られているようではあるが、あまり面白くはない。ようするに易しすぎるのだ。2ピッチでドーム下に着いてしまった。たしかにルートの取り方によってはもっと難しくなるだろうが、ここはゲレンデといった意識は少なくとも私個人にはない。本番には登る以外にルートファインディングという楽しみもある。さあてどっちに行ったらいいのかなと迷った場合、自分が初登攀者だったらどっちに行くだろうかと考えるのである。そしてその考えとルートが一致することが殆どなのである。手持ちのルート図のルートは岩の弱点をついていない。あきらかに難しい所にルートを作っている。ゲレンデとしてなら納得するが、本番としてはなんかすっきりしないものを感じた。だから我々の登ったルートの方が理にかなったルートといえる。ドーム下に着くと雲稜ルートでビバークした2人パーティのトップがロワーダウンの状態で降りてきた。悪くて登れないという。トップを交代し、もう一人が行くが、やはり登れないといって降りてきた。そしてあきらめて帰っていった。私は雲稜ルートを登ったのは28年前だが、その時のルート状態の記憶は殆どなく、あるのは1ピッチ目のハングを越すとき足が攀ってしまったのと、パートナーの名前と写真位のものだ。12月の時は目も開けていられない程の吹雪になってしまったので、しみじみとドームを眺めながら記憶を掘り起こしていた。1時間以上待っていたので体がこわばってしまった。気合を入れて古山がリードする。先行パーティが降りた所から2m登ると終了点だった。先行パーティも、もうちょっと頑張れば登れたのになあ。ドームの頭では、古山とアルピニズムとは何かをめくり激論をしたが、気がつくとも1時間も経過していた。昔のクライマーが聞いていたら、涙を流して喜んでいただける話の内容であった。ついでに岩壁にあったゴミも掃除しておいたことを付け加えておく。

美濃戸 (6:14) - 赤岳鉱泉 (8:02) - 取り付き (9:29~9:59) - ドームの頭 (14:05~15:10) - 赤岳鉱泉 (15:51~16:03) - 美濃戸 (16:59)

(本図 記)



大同心南稜・ドームの登攀

谷川岳幽ノ沢ノコ沢大氷柱

1996. 3. 24

パーティ L 古山正文、本図一統

この齢になってくると、夜行で車を運転し全然寝ないで取り付くのは非常にシンドイものがある。少しでも寝なくてはと仕事を終えてから、それこそ飯を噛み噛み家を出る。運転を古山にお願いして私は後部座席で寝て行く。土合には23時頃着き、古山も少しは寝られたようだった。このようにパートナーにおんぶに抱っこするようになっては、私の山行もそろそろ考えなくてはなるまい。

1時起床2時出発。幽ノ沢出合までトレールがあり助かる。雪の締まり具合から雪崩の心配は少ない。展望台に上がると先行パーティがツエルトを被っていた。トレールはこのパーティが付けてくれたんだろう。ヘッデンを点けての行動だがルートは蛍のケツなので不安はない。昔、一ノ倉の4ルンゼ夜間登攀とか、赤蜘蛛同人の井上氏のヨーロッパの夜間行動での氷壁初登攀（ルート名忘れた）の記録があったが、私は初め今回の登攀は取付の1ピッチはヘッデンで登り、太陽が高く上がる前には堅炭尾根に抜きたいと考えていた。

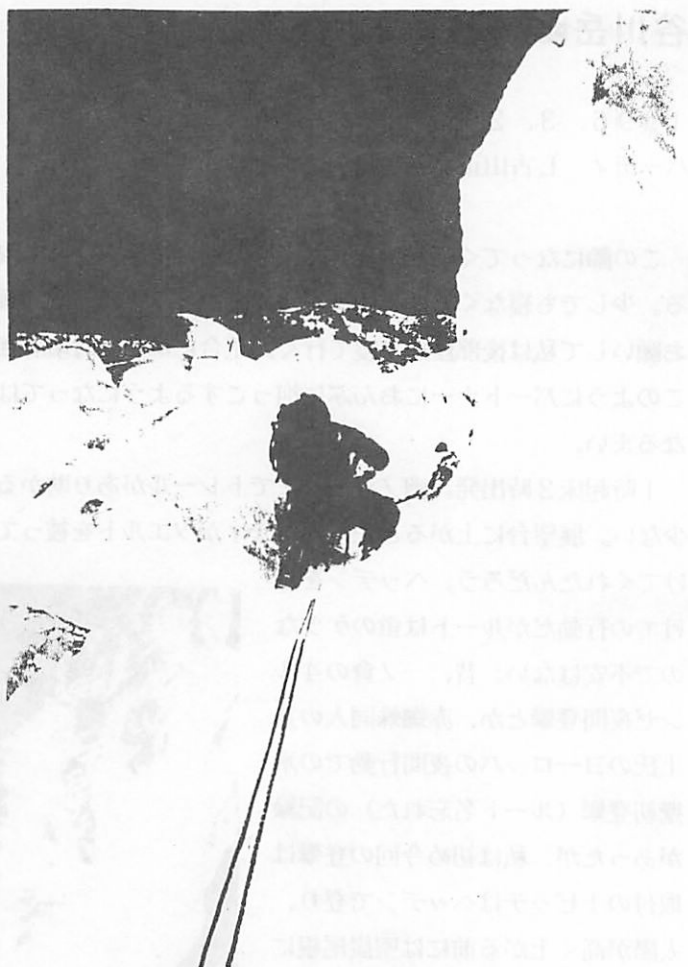
空は満点の星空である。ふと見ると北斗七星の近くに凄く明るいものがある。それが百武彗星であることに気が付くのに時間はいらなかった。回りに星の観察を妨害する明かりはまったく無く歩を止めた。ザックから望遠鏡を取り出し、しばしみとれていた。これだけ素晴らしい彗星を観測できただけでも今回の収穫はあったと言える。余談であるが、私は小学生の頃から天体観測が好きで望遠鏡なども自作したことがある。中学生のときは夜、学校に行き、望遠



ノコ沢大氷柱…1ピッチ目

鏡を借りて空を眺める天体少年だった。大人になってからもジャコビニ流星雨やハレー彗星の時には山に観測に行った。今はテレビショッピングで買った望遠鏡を持っているが、分解して仕舞ってあるので持ち出すのが面倒でやらない。星座も星雲も殆ど覚えていない、にわか天文愛好家である。

クレパスが所々にあり右に左に巻く。この辺で空は明るくなり始めてきた。シュルントで登攀準備をして古山リードで取り付く。最近、私と古山の時のザイルオーダーは、古山リード本図フォローが定番になってきた。ルートは氷壁中央と右側の2つ考えられるが右に行く。1ピッチ目、緩い氷壁40m。氷の状態は良く、アックス、アイゼン、スクリュ一共に良く効いている。今日は快適な氷壁登攀が約束できそうだ。2ピッチ目、80度を一気に登ると突然



ノコ沢大氷柱…3ピッチ目の氷の凹角

氷が無くなってしまい、左にトラバースして又氷を登る、47m。どうも中央の氷を登ったほうが良かったようだ。雪崩が来た時の事を考えたのが失敗だった。3ピッチ目、氷の凹角7mから雪壁30m。後続の単独行者が遥か下に見えている。ノコ沢を登ってくるので恐らく大氷柱を登るのだろう。

古山は新調したという氷専用のアイゼンを使いガンガン登る。最近古山は道具に凝っているようで、これは便利かなと思う物は古山に聞いてみるとたいがい持っている。私がなく彼が持っている物をちょっと挙げてみても、超高級紳士用最軽量ゴアテント、超高級紳士用GPS、グリグリ、フレキシブルフレンズ、ディジーチェーン、などなど枚挙にいとまがない。彼に無くて私にある物といえば、バックヤロ山は道具じゃねーやい技術で登んだい、という負け惜しみ位のものだろう。とはいっても氷はある程度の道具がないと登れないというのが現実ではある。

4ピッチ目からは雪壁であり、慎重に4～5ピッチ登ると堅炭尾根に出た。今日も幽ノ沢は静かでノコ沢以外誰もいない。今朝のツエルトにいたパーティはどこに行ってしまったんだろう。写真家だったんだろうか。石楠花尾根を登ったときと同じルートで芝倉沢に降り、旧道を幽ノ沢

出合まで戻ったが、腐った雪のラッセルには閉口した。旧道から見る大氷柱には後続の単独者が取り付いており、この天気とこの時間によく登るなあと感心した。私にはとても雪崩が恐くてできないことであった。

ロープウェイ土合駅(2:07)－幽の沢出合(3:36)－取り付け(5:20~5:49)

－終了堅炭尾根(9:17~9:54)－ロープウェイ土合駅(13:49)

(本図 記)



乗鞍岳・山スキー

1996. 3. 31

パーティ L 古山正文、本図一統、今井弘

『もうテレマークは、やめた!』。また今度も帰りの車で独り言をつぶやいていた。クラストした雪面に顔面から突っ込んで、鼻と唇を切ってしまったからだ。

スキー場を通り、車に乗るまで実に恥ずかしく思った。傷の程度を古山さんに聞いたら『大丈夫ですよ。スキーで死ぬ人もいますから恥ずかしくないですよ』。と言ってくれた。だが私の顔の傷も然ることながら、心の傷はかなり深いのである。

3月30日、土曜日土浦を22時30分に出発した。中央自動車道、長野自動車道も順調に走ることができ31日の午前3時30分頃、乗鞍高原温泉スキー場に着いた。何時ものように軽く酒を飲み仮眠した。

リフト始発時間に間に合わせて起床し、8時頃リフト乗場に着いた。風のため30分待たされ、8時30分にリフトに乗った。三基乗り継ぎ9時に最後のリフトを降りた。快晴の中、先行パーティが先を急ぐように登っていた。我々もスキー板にシールを着け、先行パーティを追うように快適に歩いて行く。だが、位ヶ原付近から雪面が凍結して歩きにくくなった。

11時49分、肩の小屋に着いた。小屋の中は10名ぐらい休んでいた。我々は、スキー板をデポして剣ヶ峰を目指した。13時に山頂に着いた。山頂は風もなくのんびりと景色を楽しむ事が出来た。

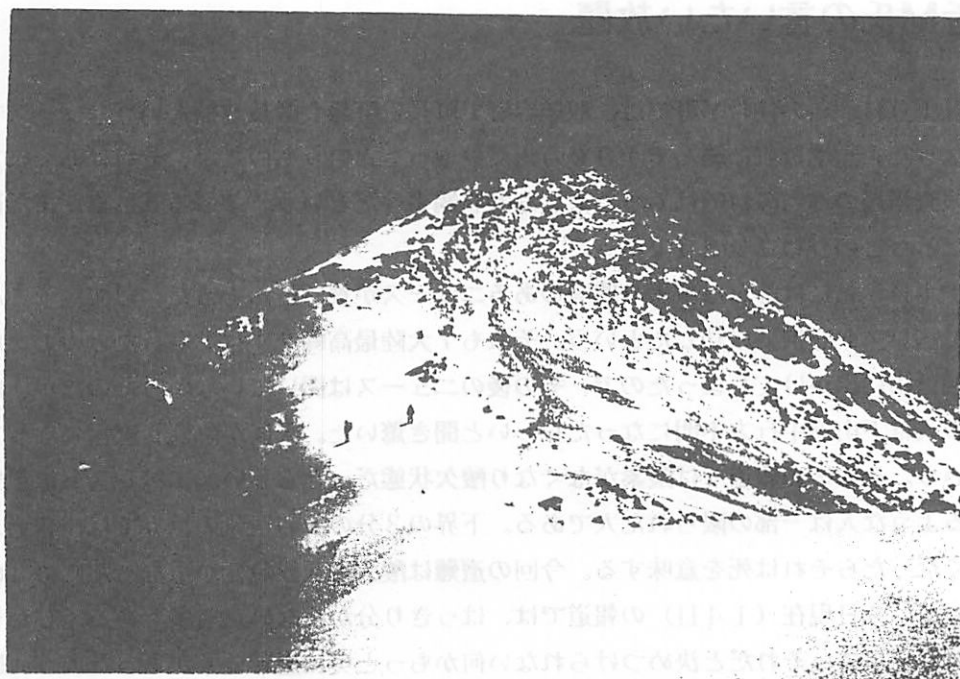
13時54分。デポしたスキー板を着けて、肩の小屋を出発した。雪面はアイスパーン状態、ターンの度に転ぶ。本図さんと古山さんはさすがにうまい。雪面はアイスパーンからもっと悪くなり表面が堅く中が柔らかいモナカ雪に変わった。スキー板を外してアイゼンを着けようかと迷ったが、待たせては悪いと思い、アイゼンを着けなかった。気持ちは焦るが思うように滑れない。また転んだ。顔からモナカ雪に突っ込んだ。起き上がると雪面が赤く染まった。鼻血だ。と、咄嗟に思った。恐る恐る顔を指で触ると、鼻の付け根と唇をちょっと切ったようだ。転ぶと鮮血が線香花火のように雪面を染める。

15時46分。スキー場を通って駐車場に着いた。すぐに車のバックミラーで自分の顔を見た。『ワオー!』。自分の顔が20年前、テレビで見た流血悪役プロレスラーの顔になっていた。テレマークをやめて、山スキーを買おうと帰りの車の中で独り言をつぶやいたのである。

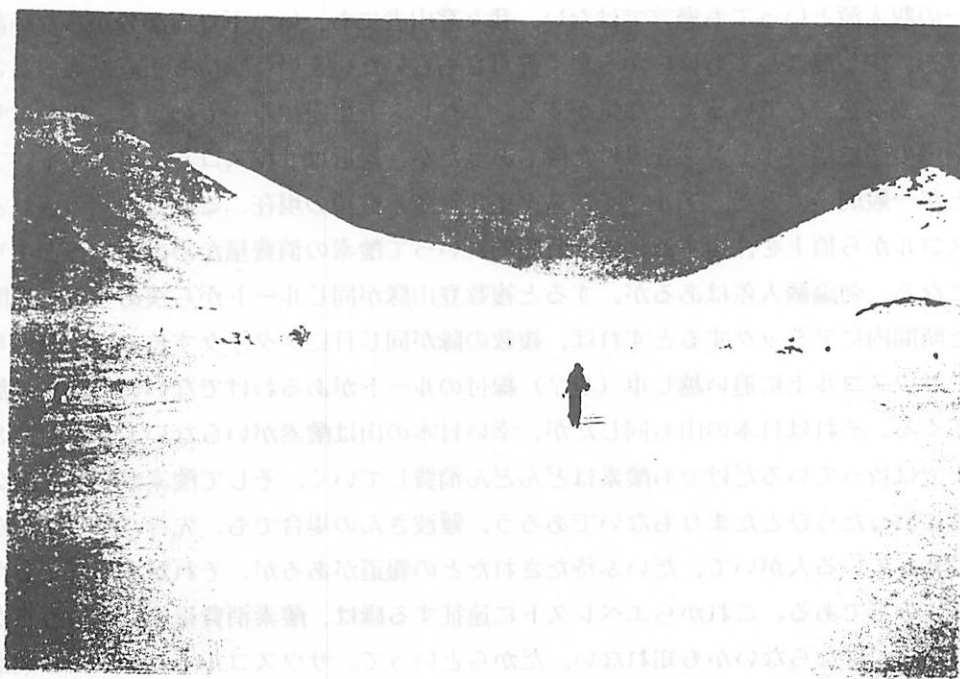
23時30分土浦に着いた。

リフト(9:00) - 片の小屋(11:49) - 剣ヶ峰(13:00) - 片の小屋(13:54) - 駐車場(15:46)

(今井 記)



乗鞍岳頂上に向かう



肩の小屋を目指して

毒舌M氏の言いたい放題

5月10日、私の住むY町では、収賄容疑で町長と町議会議長逮捕というニュースで持ち切りになった。土地買収に絡んで100万円受け取ったというものだが、それはあくまでも別件で、捜査当局の本当の目的はもっと大きな贈収賄事件だという。芋づる式にまだまだ逮捕者が出るだろうとのうわさしきりである。

翌11日、私にはそんな事より興味のあるニュースが飛び込んできた。難波康子さんという方がエベレスト登頂に成功したという。それも7大陸最高峰をすべて登ったとのことだった。その晩は山に出かけてしまったので、その後のニュースは聞いていなかったのだが、山で知人にその人は下山途中行方不明になったらしいと聞き驚いた。天候が急変し吹雪になってしまったという。その後の報道では酸素がなくなり酸欠状態だったらしい。エベレストに無酸素登頂できるような人は一部の限られた人である。下界の3分の1の空気の世界では、普通人は酸素が無くなったらそれは死を意味する。今回の遭難は酸欠と天候急変が重なったためなのかも知れないが、今日現在(14日)の報道では、はっきり分からない点も多々ある。しかし、私としてはただ単に、それだと決めつけられない何かもっと奥に遭難要素があったように思えてならない。まずネパール政府では、今年から1シーズン1ルート1パーティを変更し、複数パーティに登山許可を与えている。まあネパール政府からみれば当然のことで、全世界から許可申請がきているのに1隊しか許可しないのでは、せっかくお店に来た大勢のお客さんに1人以外売らないで帰っていただくと同じである。ネパールでは登山料及び登山者、トレッカーが落としていくお金は外貨獲得の大きな源である。というより、これといった産業のないネパールでは唯一の収入源といっても過言ではない。我々登山者にも、いつ下りるか分からない許可を待つよりも、少し混雑してもいいから早く許可をもらいたいという気持も正直ある。ここに遭難の大きな要素を含んでいるような気がする。エベレスト東南稜ルートの場合、以前はサウスコルと南峰の間に最終キャンプを設けた隊もあったが、最近はサウスコルに最終キャンプを設けることが一般的のようだ。アルパインスタイル無酸素登頂の現在、これは当然の流れといえる。サウスコルから頂上を往復するには、時間的にいって酸素の消費量から計算するとギリギリの距離になる。勿論個人差はあるが。すると複数登山隊が同じルートから決められた期間の決められた時間内にアタックするとすれば、複数の隊が同じ日にアタックするのは十分あり得ることだ。サウスコル上に追い越し車(歩?)線付のルートがあるわけでないのだから当然渋滞が起きてくる。それは日本の山も同じだが、幸い日本の山は酸素がいらない。しかし、8000m以上では待っているだけでも酸素はどんどん消費していく。そして酸素が切れ、酸欠の状態では吹雪に会ったらひとたまりもないであろう。難波さんの場合でも、先行パーティにかなり体力が消耗している人がいて、だいぶ待たされたとの報道があるが、それが本当だとしたらあまりにも気の毒である。これからエベレストに遠征する隊は、酸素消費量をこういう点からも考え直さなければならないかも知れない。だからといって、サウスコル上にもう一つ前進キャンプを出すことは資金面でも大変なことだ。アタック隊員の酸素と食料装備を上げるには、荷上

げ隊員の酸素食料装備を上げなくてはならない。そうすると、荷上隊員の酸素食料装備を荷上する荷上隊員が必要になってくる。そのように人員経費ピラミッドが大きくなり膨大な経費増になってしまう。難波さんの場合でも個人負担金が六百数十万円とか聞いている。となると、やはりネパール政府に1シーズン1ルート1～2パーティに制限してもらわないのではないだろうか。それができなければアタック隊員は無酸素でも登れる体力の人のみに限定するほかなくなる。

次に公募による登山隊でどれくらい意思が通じあえたか。メンバーシップはうまくいったか。報道ではその点については何の問題もなかったとしているが、言語の違いによるちょっとした意思疎通があったかもしれない。手袋をはずし素手で助けを求めている難波さんの姿がサウスコルのテントから見えたという。風が強くどうしようもなかったというが、この報道が本当だとすればあまりにも残念ではある。しかしそんなことを心配していたのでは、我々一般人にエベレストに行くチャンスはない。そのような懸念はあっても、もし私にチャンスがあったとしたら参加するつもりのある自分がここにいることもまた事実ではある（ただし今はだめ）。

我々一般社会人山岳会が、単体でヒマラヤのビッグサミットをアタックすることは難しい。当会でもヒマラヤを目指している者が何人かはいるが、残念ながら当会だけでは出せないのが実状である。どうしても行きたいなら前述の様な公募隊に応募するか、いくつかの会のヒマラヤ志向者が集まって行くほかない。私は後者が一番良いと考える。それもしできるならば地元で馴染みのある県岳連単位で行ければ最高である。しかし、茨城県岳連としてはヒマラヤ登山隊は出さないというのが上層部の意向であるらしい。なんでも万が一事故が起きたときの保証は大変で、岳連の親玉は破産しても追いつかないという。はたして本当なのだろうか。他の岳連で登山隊を出している所があるのに、当岳連で出来ないわけがないと思う。海外登山の保険だってあるはずだ。海外登山をやらない岳連の海外登山委員会って、いったい何をするとところなの？だから当会の元海外登山委員は、委員会に行ってもやることないからと言ってやめた。中高年の海外登山研修会も良いことである。しかし同じ海外登山でも、カナディアンロッキーのハイキングとヒマラヤのビッグ峰アタックとは全く異質のものなのだ。中高年の安全登山教育も大切だが、若人のヒマラヤビッグ峰アタックのタクティクス教育も、これから茨城県に登山という趣味をますます広げていくためには絶対必要なのである。なぜならばこれからの岳連を背負っていくのは、これらの若人達なのである。初心者教育するのに高所登山技術はいらないという考えは間違っている。それではいつまで経っても茨城県にヒマラヤニストは育たない。ここに県岳連の上層部の考えを変えていただくよう強く要請したい。

実のところ最初にした贈収賄事件で私が逮捕されるんじゃないかとヒヤヒヤしている。先日私の所にウン億円という金が転がり込んできたんだよ。だいぶヤバくなってきたから全部海外登山委員会に寄付してしまおうかな。それを元でヒマラヤに行こうではありませんか岳連の皆さん（なんてうまい話はあるわけないよな）。

(M)

《友好山岳団体の月報、会報、その他紹介》

ありがとうございました

月報

◎Rohman NO. 129 1996. 1 B5 46P 浦和浪漫山岳会

特集冬山合宿報告・川内下田山塊・Aパーティ＝水源地～栗ヶ岳ヒュッテ～堂ノ窪山～青里山～矢筈岳～三川分水峰～魚止山～林道～室谷集落、Bパーティ＝釜ノ罫～中山尾根～八匹ノ頭～ココノスジ～銀太郎山～銀次郎山～木六山～釜ノ罫、Cパーティ＝釜ノ罫～木六山～銀次郎山～銀太郎山～銀次郎山～木六山～釜ノ罫ほか

◎Rohman NO. 130. 1996. 2 B5 28P 浦和浪漫山岳会

奥美濃・斐高原・子貝月山、下田・白根山と栗ヶ岳、上越・檜倉山、会津・大博多山、上越・十二社ノ峰～小出俣山～千曲平、中ア・小黒川溪谷～胸突八丁途中ほか

◎Rohman NO. 131. 1996. 3 B5 36P 浦和浪漫山岳会

特集雪崩、上越・三ツ石尾根右稜、三ツ石尾根左稜、蔵王スキーOB山行、会越・御神楽岳・室谷～大森～御神楽岳、奥鬼怒・鬼怒沼湿原、上越・シシゴヤの頭～コマノカミの頭、伊豆・旧天城峠～新天城峠ほか

◎月報・ZAC NO. 170 1995. 11 B5 10P グループ・ゼフィルス

北ア・蝶ヶ岳～常念岳、八ヶ岳・編笠山、岩殿山ほか

◎月報・ZAC NO. 171 1995. 12. B5 6P グループ・ゼフィルス

信越・キューピットバレースキー場～菱ヶ岳～牧峠、那須・鳴内山、妙高・火打山～澄川ほか

◎月報・ZAC NO. 174 1996. 3. B5 12P グループ・ゼフィルス

吾妻・天元台～西吾妻小屋～西吾妻山～二十日平～グランデコススキー場ほか

◎わらじ NO. 478 1996. 1 B5 16P わらじの仲間

白山南部縦走ほか

◎わらじ NO. 479 1996. 2 B5 30P わらじの仲間

正月合宿・飯豊赤ツタ尾根、全山縦走、本山松ノ木尾根、蔵王の私設山岳無線局、冬山合宿気象報告、南ア・仙丈岳と甲斐駒ヶ岳ほか

◎わらじ NO. 480 1996. 3 B5 18P わらじの仲間

雪崩講習(雪崩に正しく対処するには)、花の大雪山を歩く、新春ハイキング、越後・登川大グラ沢右稜と左稜から大源太山北方稜線ほか

◎逍遙 NO. 56 1996. 1 B5 12P 逍遙溪稜会

奥多摩・小川谷カロー谷、大菩薩・滝子山、西丹沢・世附川水ノ木沢、奥秩父・後山川御岳沢、八ヶ岳・阿弥陀岳、谷川岳西黒尾根ほか

◎逍遙 NO. 57 1996. 2 B5 12P 逍遙溪稜会

谷川・白毛門山、奥多摩・大岳山、北ア・燕岳、北八ヶ岳・天狗岳ほか

◎逍遙 NO. 58 1996. 3 B5 10P 逍遙溪稜会

八ヶ岳・横岳石尊稜、丹沢・水無川源次郎沢、湯河原幕岩RCTほか

◎Next! No. 1 1996. 1 B5 24P 山岳溪流釣り集団むげん

奥秩父・トウガク沢にて、Iさんの遭難事故、奥多摩・つづら岩RCT、地獄の一日(日帰りボツカ)、みちのり(仲間の近況報告)ほか

◎Next! No. 2 1996. 2 B5 32P 山岳溪流釣り集団むげん

奥多摩・つづら岩、湯河原・幕岩、北ア・黒部北又本谷、仲間の近況報告、会員住所録ほか

◎Next! No. 3 1996. 3 B5 24P 山岳溪流釣り集団むげん

新人紹介、奥多摩・つづら岩、北ア・尾安谷、仲間の近況報告ほか

◎とまのかぜ No. 39 1996. 2 B5 20P 童人とまのかぜ

神津島・天上山、南ア・仙丈岳、中央ア・空木岳、高湯・吾妻スキー場・五色沼・酸ヶ平・浄土平・吾妻小屋・高山・土湯、ニトヌプリ南西斜面スーパースキー、シキシャナイ岳ほか

◎とまのかぜ No. 40 1996. 3 B5 26P 童人とまのかぜ

上信越・的岩山、禿岳敗退記、奥秩父・冬の鶏冠谷右俣、上州武尊山、車坂峠・東麓ノ登山・地蔵峠、山形蔵王・宮城蔵王、二口山塊・南面白山・面白山ほか

◎騷溪醉峽(さけすき) No. 39 1996. 1 B5 24P 騷溪醉峽山の会

上信越・裏岩菅山、上信越・白砂山、白砂山・佐武流山・苗場山・栃川、魚野川、渋沢右俣・白砂山・清津川・赤湯・苗場山・栃川、八間山・堂岩山、八間山・白砂山ほか

◎騷溪醉峽 No. 40 1996. 2. 3 B5 8P 騷溪醉峽山の会

南ア・北岳ほか

会報

◎すずらん 16号 1995. 11 B5 177P 鈴蘭山の会

山スキーの記録では信越・四阿山、北ア・焼岳、越後・裏巻機、北ア・母池・母海初雪山・日本海、東北・白神岳、越後・浅草岳、頸城・火打北面空沢・笹倉温泉、越後・秋山・苗場山、東北・月山・肘折温泉、北ア・柳又源流と五輪、黒部源流と笠ヶ岳、柳又・北又谷・初雪山・大平ほか、沢登りの記録では足尾・ウメコバ沢、越後・清津川釜川ヤド沢、五十沢川下の滝沢、オツルミズ沢、朝日・八久和川、北ア・真川蔵谷・黒部上の廊下、飯豊・大又沢、飯豊・飯豊川本流、北ア・双六川・黒部赤木沢、谷川・東黒沢・ナルミズ沢、東ゼン・ヒツゴー沢、笹穴沢、南ア・尾白川黄連谷右俣、石空川南沢、奥秩父・笛吹川鶏冠沢右俣、左俣、丹沢・早戸川原小屋沢ほか

◎溪 18号 1996. 1 B5 244P 浦和浪漫山岳会

奥利根・93年冬合宿越後沢尾根厳冬期初登、94年冬合宿越後駒ヶ岳マキグラノツルネ、奥利根・上越・越後・信越の山々として21本、南会津の山々と溪として9本、会越・只見川中流左岸流域の沢として13本、近郊の山々と溪として9本、東北・北アの山々と溪として12本、93年春合宿頸城・海谷山塊8本、94年春合宿剱岳北方稜線6本、93年秋の集中東北・虎毛山4本、94年春の集中奥鬼怒・黒岩山5本、94年秋の集中上越国境・下津川山5本、特集下田川内12本、93年夏合宿川内杉川源流9本、94年夏合宿川内大底川流域8本、会員紹介、93年度94年度山行一覧ほか

以上閲覧したい方は本図まで

《編集後記》

今回号も、かなり遅れての発行となり、前編集長のようにはいきません。それをみかねてか？次号より鬼の編集長が復活いたします？……。一応は原稿依頼、収集を担当して頂く事となりました。本当にありがたいことです。気弱な私では、皆に舐められてしまい、集まるものも集まりません。

でも次号からは“鬼の平八”のごとく不らちな輩を、バツバツと蹴散らし、あつと言う間に、編集も終わるような気がします。次号からの“鬼の平八”こと前編集長の絶大な力を持って、不らちな輩はお縄にされる事と信じます。

(編集長)



季報 [R&V] 第20号 発行1996年 冬号

発行者：鯉河仁志

発行所：ACC-J茨城

〒306-05茨城県猿島郡猿島町逆井318

生井一男 方

編集者：生井一男

印刷所：やさと印刷

